三、丁抹　人口約三百四十萬

陸軍、約二師團で兵力冬は約四千、夏は約一萬

海軍は沿岸警備用小艦艇若干

空軍勢力は論ずるに足らず

四、ノルウェー　人口約二百八十萬

陸軍、約六師團で兵力冬は約一萬八千、夏は約三萬

海軍は海防艦四、驅逐艦九、潛水艦九隻等々、合計約四十七隻、四萬噸

空軍、約百機

以上の如く獨逸は空軍に於て斷然優勢を占め、事實之を以て數倍優勢なる英海軍に大なる損害を與へ、英軍をしてノルウェー作戰を斷念せしめた。丁抹、ノルウェー軍の勢力は論ずるに足らず。

獨逸がノルウェーに向つて行動を起す爲めには、どうしても其の中間に位する丁抹本土と、そして此の本土と瑞典との間に在る諸島嶼並に大小ベルト海峽、カテガット海峽とを制するの必要がある。獨逸は丁抹に對しては固よりノルウェーに對しても陸海空軍を以てする電擊的な侵入により速かに要地を抑へ其の實力の下に政府を威嚇して抗戰意志を拋棄せしめようとしたのである。

そこで丁抹方面へ向けた軍隊は、

司令官　カウピッシュ空軍大將

固よりノルウェーに對しても陸海空軍を以てする電撃的な侵入により速かに要地を押へ其の實力の下に政府を威嚇して抗戰意志を抛棄せしめようとしたのである。

そこで丁抹方面へ向けた軍隊は、

司令官　カウピッシュ空軍大將
輕師團　一
裝甲旅團　一
上陸作戰部隊及び資材若干
海軍及び空軍の一部

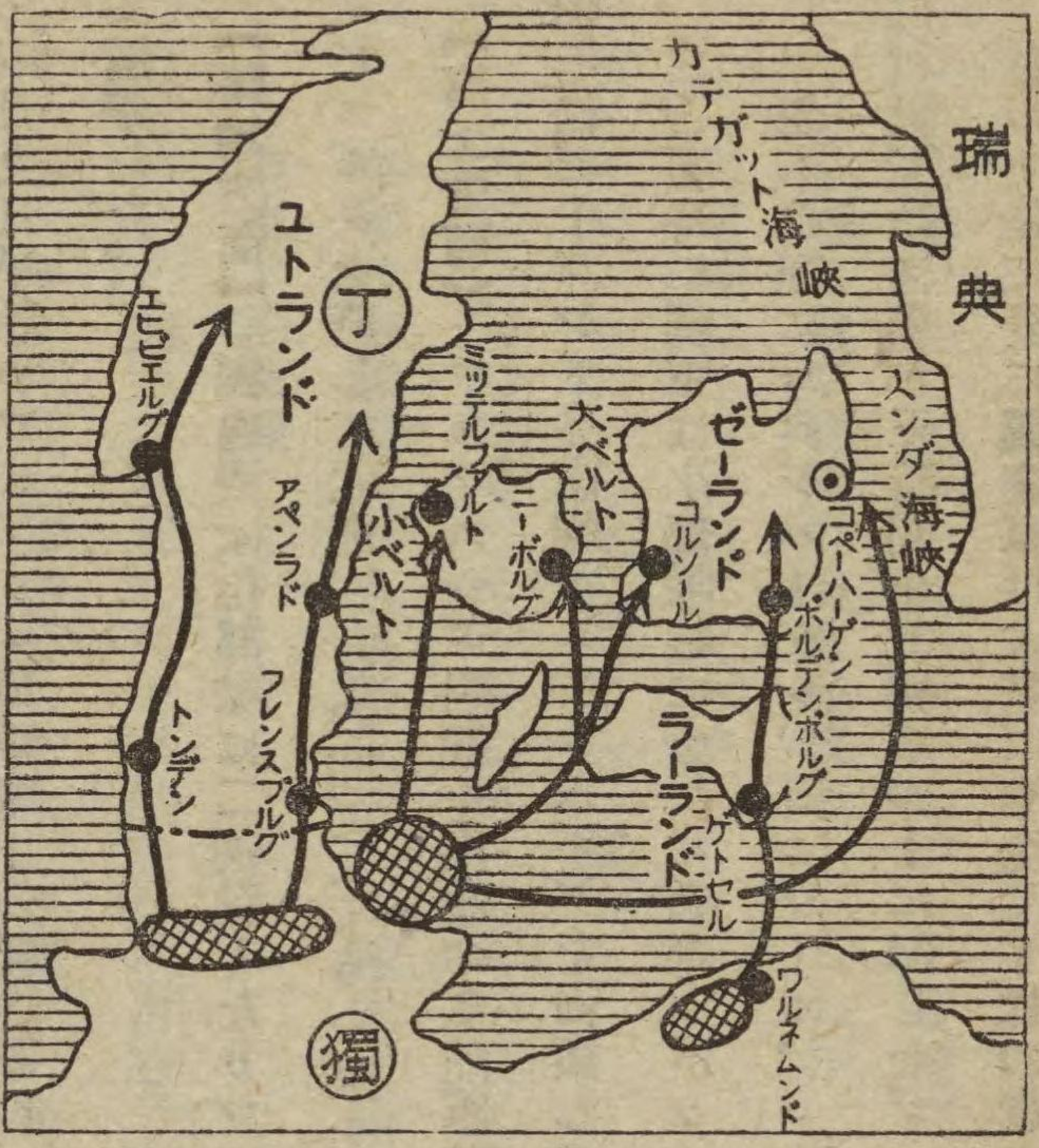
四月九日早朝カウピッシュ將軍麾下の獨逸軍は、陸海空の三方面から突然國境を突破し、疾風迅雷の勢ひを以て進撃した。

【陸地方面】 獨逸機械化部隊は二縱隊となりフレンスブルグ及びトンデン附近より突進し、アペンラド及びエスビェルグを略して北進、一日の間にユトランド半島を占領した。餘りの疾さに人民は唯茫然たる有樣であつた。

【海上方面】 ワルネムンド附近を出發せる陸軍部隊はラーランド島東南端ゲトセルに上陸して北進し午後一時頃にはゼーランド島南端ボルデンボルグを占領して前進した。

之と同時に獨軍は小部隊毎に分れ、首都コペンハーゲン及び大ベルト海峽、小ベルト海峽に向ひ奇襲的に上陸し、忽ちの裡にコペンハーゲン、コルソール、ニーボルグ、ミッデルフアルト等の要衝を殆んど占領した。首都は行動開始後僅か三時間半で獨軍の手に歸した。

此の上陸に於て獨逸軍は大膽にも全く丁抹の意表に出て各地の港內に侵入上陸し、豫め謀略により配置した人



丁抹侵略

（四月九日）

員（第五列部隊）と相俟つて要地の占領を完了したものである。此の時空軍は是れ等の陸海部隊と呼應して一擧に丁抹の上空を制して了つた。

之と同時にコペンハーゲン駐箚獨逸公使は丁抹政府に對して强硬な要求書を交付した。丁抹としては固より獨逸と交戰する能力もなく、主權の侵害せられざるを理解して獨軍の進駐を容認した。それで獨丁兩軍の間に差したる衝突もなく獨軍は僅か一日にして丁抹全土を無血占領することが出來た。

第三節　獨軍のノルウェー上陸戰（四月九日―十五日）

ノルウェー作戰に任じた獨軍は、

陸軍指揮官　　フアルケンホルスト步兵大將

海軍指揮官　　ザールヴェヒター海軍大將

海軍別動隊指揮官　　カールス海軍大將

ノルウェー作戰に任じた獨軍は、

陸軍指揮官　　ファルケンホルスト步兵大將

海軍指揮官　　ザールヴェヒター海軍大將

海軍別動隊指揮官　　カールス海軍大將

空軍指揮官　　ガイスラー空軍中將

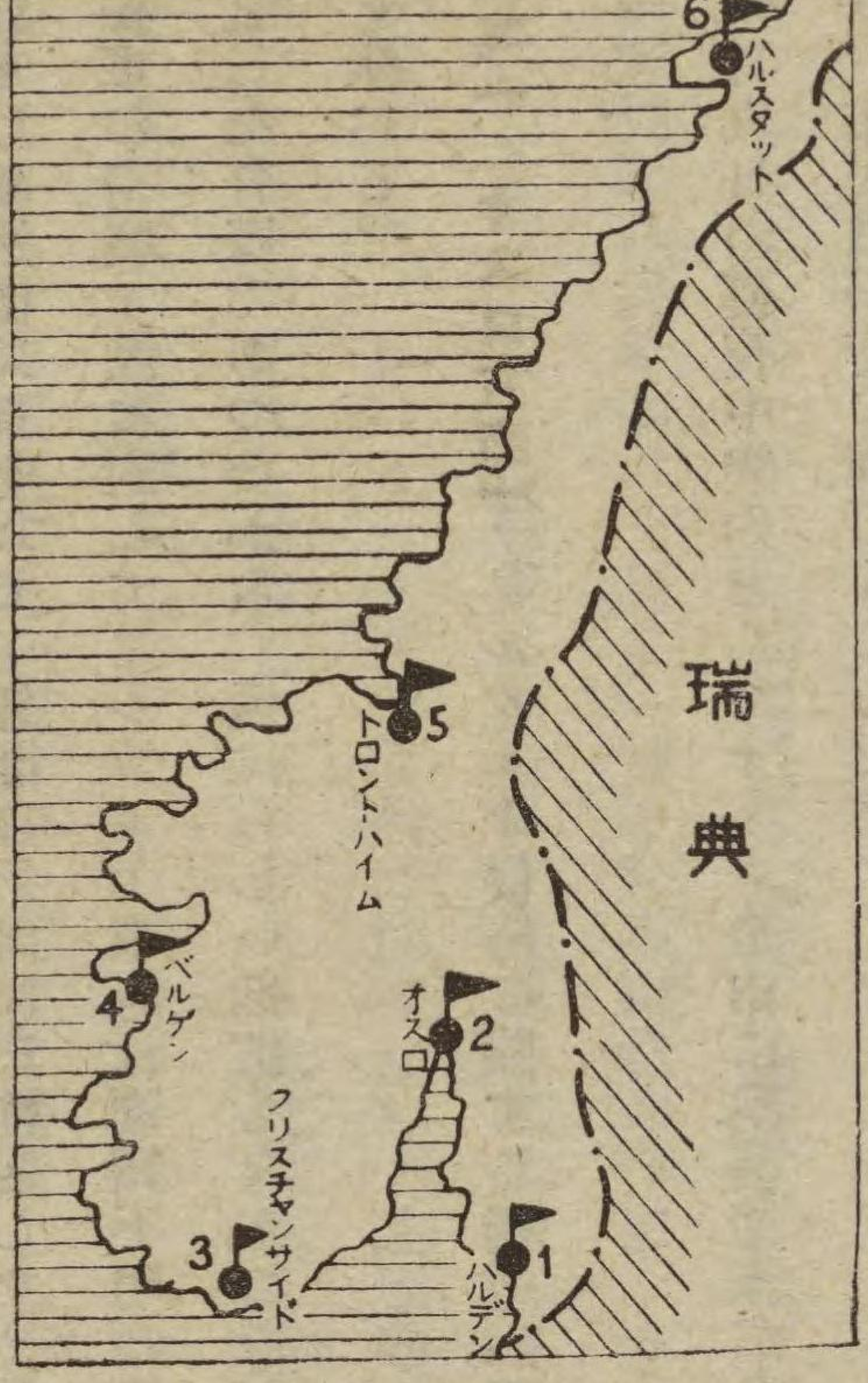
一、陸軍　　三、乃至四師團

　　裝甲部隊　若干

一、海軍　　主力

一、空軍　　約半部

作戰當初はヒットラーが最高統帥であつたが、作戰の進捗に從ひファルケンホルスト大將總指揮官となる。兵力も亦逐次增加された。之に對するノルウェーの師團數は六個で其の所在地は挿圖の如し。



ノルウェーの軍備

不意電擊によつて最初の奇效を企圖せる獨軍は半箇月前卽ち三月二十四日頃から商船に軍隊と武器とを祕密裡に積込み四月七日頃本國の港灣を竊に出航し、英國海軍の監視を冒して北洋の寒冷と非常な荒天を物ともせずノルウェーの諸港に潛み入り機の熟するのを待望してゐた。やがて四月九日午前一時半を期し一齊にノルウェー海岸の要地に奇襲上陸を敢行した。今其の地點を北方から順に述ぶれば、

ナルヴィク、トロントハイム、アンダルスネス、ベルゲン、スタバンゲル、エゲルズンド、クリスチヤンザンド、アレンダール、オスロ。

等であつて、此の冒險輸送の一部は敵の攻撃を受け相當の損害を受けたが、其の機先を制せること丶、獨海軍就中優勢な空軍の掩護によつて大體豫定の上陸を行ふことが出來た。兎に角地から湧かず、天から降らず、事實獨逸沿岸から、北方ナルヴィク迄二千キロの遠距離を海上並に空中を輸送した其の手際は驚歎に値する。空中輸送の如きは輸送機二百を以て一週間に三師團を輸送した。又落下傘に負ふ所も極めて大であつた。

獨軍の奇襲上陸に對してノルウェー政府は國籍不明の艦隊が侵入し來たる旨の報告に接し、意外の事實に驚き混亂した有様であつたから、抵抗らしい抵抗もなかつたが、オスロ其他に於て若干の戰鬪が行はれた。今其の概況を述べる。

【其一　オスロ方面】　ノルウェー侵略に關する獨逸の深謀遠慮には驚く許りである。今オスロ方面の狀況を概說する。

四月九日の眞夜中突如としてオスロ全市に空襲警報が鳴り響いた。市中は唯ならぬ狀態に陷り、不穩な形勢となり、市民は不安に驅られてゐた。

當時オスロ灣口の防備はどうなつてゐたかと云へばホルテン要塞沖に三隻のノルウェー軍艦が碇泊してゐた。此の軍艦には何者かから命令があつて獨軍に對して抵抗すべからずと云ふのであつた。又オスロ灣の狹い所に張

り詰めてあつた機雷を接續せる電線も切斷されてあつた。かうして置いて灣内に侵入し來たる獨逸艦船を迎へる

四月九日の眞夜中突如としてオスロ全市に空襲警報が鳴り響いた。市中は唯ならぬ形態に陥り、不穩な形勢と
なり、市民は不安に驅られてゐた。

當時オスロ灣口の防備はどうなつてゐたかと云へばホルテン要塞沖に三隻のノルウェー軍艦が碇泊してゐた。
此の軍艦には何者かから命令があつて獨軍に對して抵抗すべからずと云ふのであつた。又オスロ灣の狹い所に張

り詰めてあつた機雷を接續せる電線も切斷されてあつた。かうして置いて灣內に侵入し來たる獨逸艦船を迎へる積りであつたらしい。此の謀略は早くから獨逸とオスロに居る親獨派キスリング（元ノルウェー陸相）との間に約束されたものだらう。然るにどうしたことか唯一隻のノルウェーの機雷敷設艦トリガソン號だけに其の命令が傳はつてゐなかつた、（それは同艦は修繕に廻はされてゐたとされてゐた。）

一方獨逸輸送船團は三隻より成る艦隊護衞の下に、かねて諜し合せたことゝて悠揚迫まらず全く自國港灣に進入するつもりで靜かに航進したるに、豈圖らんやオスカルスブルグ砲臺から二十八サンチ砲の射擊を受け一萬噸巡洋艦ブリッヘルは五分と經たぬ內に沈沒した。之は砲臺にあるノルウェーの一將校が反獨心から號令したものであつたらう。それと前後してトリガソン號敷設艦も發砲して獨逸の五千噸級の輕巡洋艦エムデンに大損害を與へ、水雷艇一隻を擊沈した。

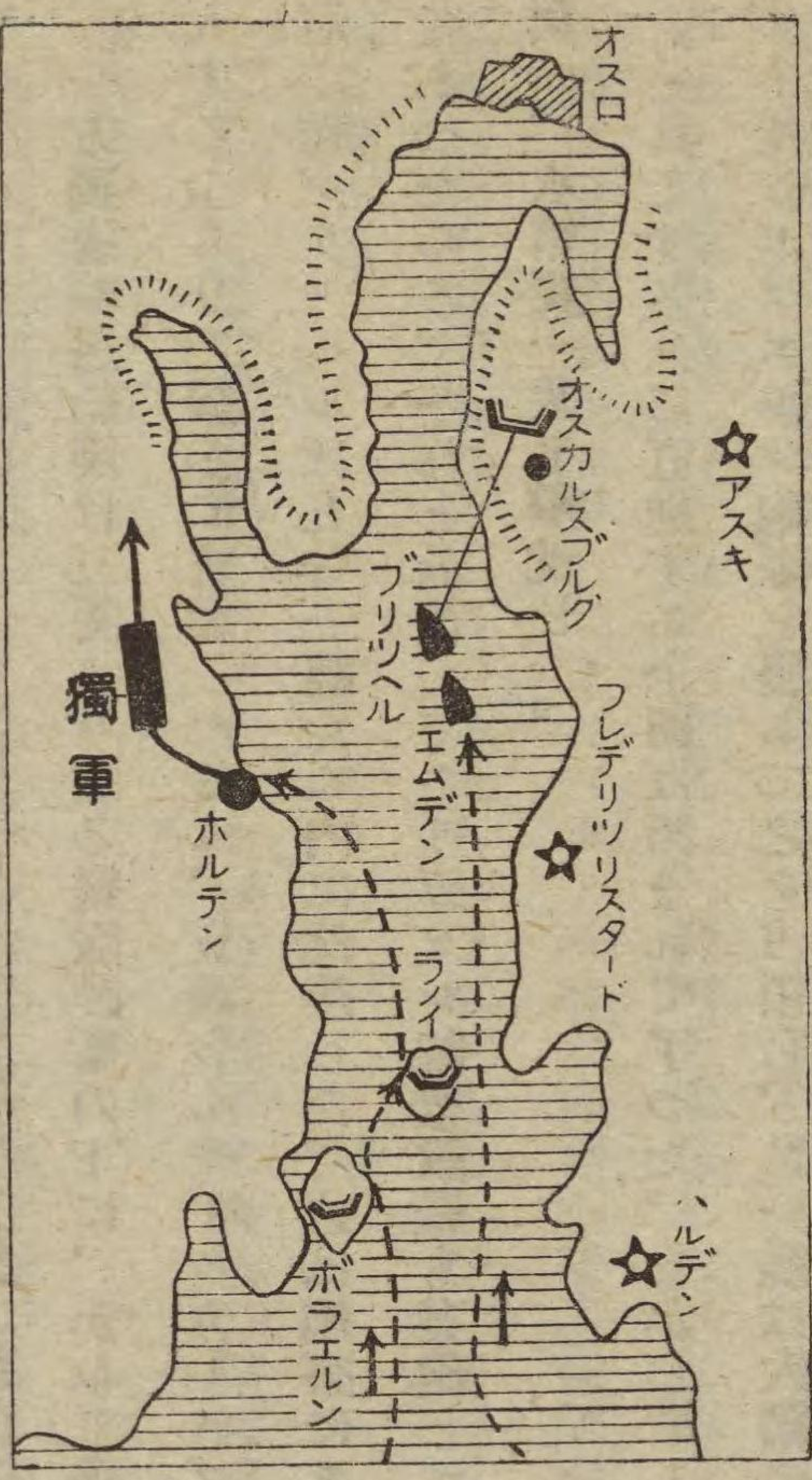
それでオスロに直進する企圖は阻まれて了つた。しかし斯んなことで頓挫する獨兵ではない。彼等は直ちにラノイ及びボラエルン砲臺を襲ふて之を占領し、又一艦は大膽にも夜暗を縫ふてホルテン軍港內に突入し百名ばかりの水兵が上陸し小競合の後同要塞司令官に迫まつて開城せしめた。守兵の多くは上官の命令で武器を持つてゐなかつた。之より彼等はオスロ市へ陸路進軍したが、（距離五十キロ）之より先オスロは獨逸飛行部隊によつて占領された。

擊沈されたブリッヘル號には獨逸の先遣部隊が乘船してゐたが、僅か四十名だけ助かり其他は艦長も幕僚も皆

海の藻屑と消え去つた。

一方オスロ港の埠頭には未明から何ものかを待つて痺れを切らしてゐる一團があつた。此の內にはオスロ駐在獨逸公使の姿も見えた。公使館員、獨逸通信員、親獨派の面々も皆集まつてゐた。是れ等はブリッヘル號で來る獨逸先遣部隊の歡迎委員達であつた。彼等の計畫はブリッヘル號が著いたならば直ちに上陸してノルウェー國王ハーコンを始め閣僚全部を捕縛する手筈になつてゐたらしい。然るにブリッヘル號は三時になり四時になり四時半になつても姿が見えぬ。埠頭の迎接委員の顏には焦躁の色が見えた。

しかし剛愎な獨逸公使は計畫の故障を看て取り斷然ノルウェー政府に覺書即ち最後通牒を突きつけた。其の要旨は英佛聯合國はノルウェーを占領して獨逸を包圍せんとしてゐる。獨逸は之に對し先手を打つ必要上ノルウェーに進駐せんとす、諾否の即答を求む。と云ふ嚴重な談判であつた。此の談判中空中轟々たる大空軍の唸りを聞くのであつた。



オスロ攻擊
（四月九日）

は英佛聯合國はノルウェーを占領して獨逸を包圍せんとしてゐる。獨逸は之に對し先手を打つ必要上ノルウェーに進駐せんとす、諾否の即答を求む。と云ふ嚴重な談判であつた。此の談判中空中轟々たる大空軍の唸りを聞くのであつた。

然るにノルウェー政府は勇敢にも獨逸側の要求を拒絕した。而して附言するに、獨逸總統ヒットラーが曾つて「何等の抵抗をなし得ずして敵に降伏するやうな國民は存在に値しない」と云つた言を以てした。彼等は今こそ去勢されてゐるやうであるが、其の血の内には昔のノルマンの素質を持つてゐるやうだ。

國王ハッコン七世は形勢の漸次危險なるに鑑み政府をオスロ北方百吉米のハマル市に移したが、獨空軍並に陸軍の進擊を恐れ其の後、ハマルの東北方にある瑞典國境の一寒村エルヴェルムに避難した。而して全國に動員を令しルゲ將軍を總指揮官として英佛の後援により獨逸に抗せんとした。

旣にして四月九日の朝五時過ぎになると、獨空軍がオスロ上空に鵬翼を飜して低空示威飛行があり、其の内フオン・フアルケンホルスト將軍麾下の獨軍僅か千五百名が先づオスロを占領した。市民一人の反抗するものもなかつた。親獨派のキスリングの新政府組織に關する放送が行はれ、獨軍は樂隊吹奏裡に市中を練り步いた。市民は唯呆然として催眠術に罹かつたやうであつた。

翌十日には獨逸兵が約三千に增加し市と附近要塞を鎭壓したので一段の沈著振りを見せた。オスロの市民は餘りに文化し過ぎ、餘りに長く平和國民であり過ぎたのであつた。

斯くて威嚇を以てノルウェーを屈服せしめようとする獨逸の企圖は失敗に歸した。玆に於て獨逸はキスリング元陸相（少佐）をして親獨内閣を作らしめ、全國に對し獨軍に對する抵抗を中止するやう傳達した。此の結果ノルウェー國民は去就に迷ひ、國民一致の行動に出る事が出來ず、到る處に重大なる錯誤が起つた。弱小國は何れ

も此の種の悲しむべき運命に陷るものだ。

【其二　クリスチヤンザンド方面】　獨巡洋艦カールスルーへはクリスチヤンザンドに迫まり其の砲臺より長時間猛射を被つたが、此の間に小部隊は奇襲的に上陸して同砲臺を占領した。しかしカールスルーへ號は重大な損傷を受けて遂に沈沒した。上陸軍は同地に在るノルウェー軍を擊退して同地の飛行場を占領し、逐次其の區域を擴大すると共に兵力の增强を圖つた。

【其三　スタバンゲル方面】　同地にはノルウェー隨一の飛行場あるを以て四月九日早朝落下傘部隊により之を占領した。敵兵約千名あつたが大いに恐れて東南方に走つた。爾後占領地域の擴大を圖ると共に飛行基地を設定した。

【其四　ベルゲン方面】　ベルゲンはノルウェー第一の海港であり、英國東海岸のニューカッスルを繫ぐ定期航路がある。此處から丁抹のユトランド迄三百浬、英國北端のスカバ・プロウ軍港まで二百七十浬しかない。英海軍を攻擊する根據地としては此のベルゲンとスタバンゲルとは絕好の地點である。

四月九日未明、獨逸艦隊は入港し、かねて諜し合した第五列部隊と協力して忽ちベルゲン市及び同地の砲臺を占領した。此の時守兵には一戰の意氣など藥にしたくもなく、唯斷崖要塞を死守する若い中尉一人のみであつた。此の中尉はピストルを手に部下を激勵し、一人でも此處を退いたら射殺するぞと威嚇した。彼と共の小隊のみが善戰したが二時間ばかりの交戰で中尉は戰死して遂に陷落した。

獨軍は更に同港碇泊中の兵器彈藥を滿載した運送船五隻を鹵獲した。之は正しく英國上陸軍の先遣部隊であつ

獨軍は更に同港碇泊中の兵器彈藥を滿載した運送船五隻を鹵獲した。之は正しく英國上陸軍の先遣部隊であつたのである。

獨逸空軍は同日ベルゲン西方二百浬の海上に於て優勢な英國艦隊を發見し、爆彈の雨を降らせて、戰艦四隻、巡洋艦四隻、運送船二隻に命中彈を浴せ多大の損害を與へた。出鼻を挫かれた同艦隊は這々の態で本國へ逃げ歸つた。之は恐らくノルウェー遠征軍の第一陣であつたらしい。かくて獨逸軍は僅々數時間の差で、英軍に對し機先を制したのである。戰闘の勝敗は此のやうな機微の間に於て決せられる。故に昔から兵は神速を尙ぶと云はれてゐる。

【其五　トロントハイム方面】　トロントハイムはノルウェー最大の商工都市で其處には灣口に四個の城砦があつて市を防護する役目を備へてゐる。其の一つは最も前方にあり最堅の稱あるアズネス砲臺であるが、此處でも他所と異ならざる醜態を演じたのである。

獨軍は巡洋艦一、驅逐艦若干より成り四月八日夜此のアズネス砲臺前に現はれた。守兵は機關銃と輕砲を持つて壘外に飛び出し獨逸軍を邀擊する態度を執つた。こゝまでは上の出來榮えであつたが、やがて獨逸兵が上陸して二百、三百名となると、ノルウェー司令官は各堡壘に向つて投降を號令した。「部下を救はねばならぬから」と云ふのが彼の投降理由であつた。

それより獨軍は同砲臺占領後灣內を進航した。途中兩岸の堡壘中から唯一發の砲彈を受けたに過ぎなかつた。

之も何かの間違ひで要塞兵の一人が誤發したものらしいのである。然るに其の一彈がドイチュランド級の戰艦に命中して遂に之を淺瀬に坐礁せしむるに至つたが、怪我の功名と云ふもの乎。

九日未明には艦隊輸送の兵員は、曩に商船を裝ひ入港してゐた輸送船の兵員と共に上陸して、容易に市街を占領した。トロントハイムは其の細長く陸地に灣入した入江によりノルウェーを南北に二分し地形上の要點であるから、此の占領はノルウェー攻略上特に重大なる意義を有するものである。

【其六　ナルヴィク方面】 ナルヴィクに向つた獨逸最新驅逐艦九隻はボンテ大佐の指揮の下に比類稀なる暴風雪を冒し幸ひに英國艦隊と遭遇することなく、四月九日未明ナルヴィク灣に入ることが出來た。千百浬の海上を二日間で航行した譯である。

かくてナルヴィク入港の際ノルウェーの海防艦二隻を撃沈し、然る後商船に裝ひ先航せる八隻の輸送船及び驅逐艦より約千五百名の山岳部隊の精鋭（主として舊墺太利出身兵）を上陸せしめた。

ナルヴィク市の守備隊長は親獨派で大なる抵抗をなさなかつたが、其の部下に反對者あり隊長を捕へて抗戰したので、霎時交戰の上之を撃退して同市を占領した。

多年諜報の練達を以て誇つてゐた英國が、どうして以上のやうな大規模の獨逸渡洋作戰を知らなかつたのか。今其の顚末を述べて見る。四月七日英國海軍省はヘリゴーランド方面偵察中の飛行機より獨逸艦隊北上の報告を得たが、獨逸の企圖に就いては何等判斷し得なかつた。然し兎に角速かに本國艦隊を出動せしめて獨艦を捕捉撃滅するに決し、戰艦戰隊及び第二巡洋艦戰隊を基幹とする艦隊は四月七日夜、又第一巡洋艦戰隊は八日朝スカパ・プロー根據地を出港しベルゲン方向に向つたが、數十機より成る獨逸飛行隊の爆撃を受け多大の損傷を被り沈沒

多年諜報の練達を以て誇つてゐた英國が、どうして以上のやうな大規模の獨逸渡洋作戰を知らなかつたのか。今其の顚末を述べて見る。四月七日英國海軍省はヘリゴーランド方面偵察中の飛行機より獨逸艦隊北上の報告を得たが、獨逸の企圖に就いては何等判斷し得なかつた。然し兎に角速かに本國艦隊を出動せしめて獨艦を捕捉擊滅するに決し、戰艦戰隊及び第二巡洋艦戰隊を基幹とする艦隊は四月七日夜、又第一巡洋艦戰隊は八日朝スカバ・プロー根據地を出港しベルゲン方向に向つたが、數十機より成る獨逸飛行隊の爆擊を受け多大の損傷を被り沈沒艦をも出した。（前說ベルゲンの部參照）且つ天候非常に不良であつた爲め英艦は引返へした。それで獨軍の上陸企圖を阻止することは出來なかつたのである。

斯く獨逸に一籌を輸した英國は決してそれで默視する者ではない。彼は翌十日未明驅逐艦を以てナルヴィクの襲擊を行ふた。卽ちリー大佐の率ゐる英國第二驅逐隊（五隻を基幹とす）、獨逸側の警戒不備に乘じ濃霧に紛れて大膽にも滿潮時を利用してナルヴィク灣に突入し、彼我激戰の結果、獨逸側は十一隻、英吉利側は五隻の損害を出だし、英軍は戰場より退却した。

ナルヴィク占領につき失敗に失敗を重ねた英軍は四月十三日正午頃三萬六百噸ワルスピット戰艦以下九隻より成る大艦隊を出動させて港內進入を企てた。此の艦隊はウィトウォルス中將の指揮の下に大膽にも細雨に煙るナルヴィク灣內に侵入して獨艦と戰ひ、其の七隻を擊滅して大いに英海軍のため萬丈の氣を吐いた。此の時獨逸海兵は全部上陸して山岳部隊と共に死力を盡して之を防ぎ、彈丸も水雷も擊ち盡したので艦船を以て横に港口を閉塞して敵艦の侵入を防いだ。此の戰に獨驅逐艦司令ポンテ大佐は戰死した。

以上獨軍の各地上陸は案外大成功を以て終り、爾後其の地附近に勢力を擴大し、鐵道遮斷、飛行基地の設立、所在海岸砲臺を接收して防備を整へ、機雷を敷設して英艦の來攻に備へ、高射砲を配置する等懸命の努力を盡し

た。而して飛行機並に輸送船を以て增加隊及び資材を追送して占領地の强度を增した。獨海軍主力はスカゲラック海峽以東に收容、集結して專ら獨本土とノルウェー間の海上連絡の確保に任じた。

英軍は前述の如く艦隊を以て獨艦隊及び後續部隊の輸送船を攻擊すると共に獨軍上陸地に對して砲擊並に空襲を行つたが、大なる成果を收めることが出來なかつた。

英軍は豫ての計畫に從ひ、ノルウェー沿岸に機雷を敷設せんとしたが、僅か十二時間の差で獨軍に先手を打たれ、それを實行することが出來なかつた。

第四節　ノルウェー國內戰（四、五、六月）

【英軍の上陸】　獨軍の爲め機先を制せられた英佛聯合側は、一兵もノルウェーに上陸させ得ぬとあつては其の面目威信にも係はるので、最高會議を開いて對策を凝議した結果、速かにノルウェーを奪回し一つは以て獨逸の戰略的優位を奪ひ、一つは以て戰局の全面的擴大を企圖して英佛聯合の遠征軍をノルウェーに送ることゝなつた。之が爲めの作戰方略の大要は次の如くである。

北部ノルウェーに於てはナルヴィクを奪ひ以て瑞典のキルナ鐵鑛の輸出口を押へ、

中部ノルウェーに於てはトロントハイム附近を占領して戰略的優位を占め、少くもトロントハイム以北のノルウェーを其の手に收めようと云ふのである。

た。之が爲めの作戰方略の大要は次の如くである。

北部ノルウェーに於てはナルヴィクを奪ひ以て瑞典のキルナ鐵鑛の輸出口を押へ、

中部ノルウェーに於てはトロントハイム附近を占領して戰略的優位を占め、少くもトロントハイム以北のノルウェーを其の手に收めようと云ふのである。

右の實行策としてナルヴィク方面には四月十五日同市の西北方約六十吉米ヒンネ島上の一小漁村ハルスタッドに兵を上陸させてナルヴィクを攻略し、トロントハイムに對しては四月十八日大兵を其の北方約百六十吉米のナムソスと、同じくトロントハイムの西南アンダルネスとに上陸させ、遠巻きにトロントハイムを包圍挾擊しようとの作戰であつた。右のハルスタッド、ナムソス、アンダルネスの三地點は何れも獨軍の未だ占領しあらざる處なので、彼等はそれを狙つて上陸を企てたもので、其の兵力は總計二、三個師團以下と見られ、主として加奈陀及び新募英本國兵であつた。以上の作戰は計畫としては實に巧妙なものであつたが失敗に終つた。其の戰況は次の如くである。

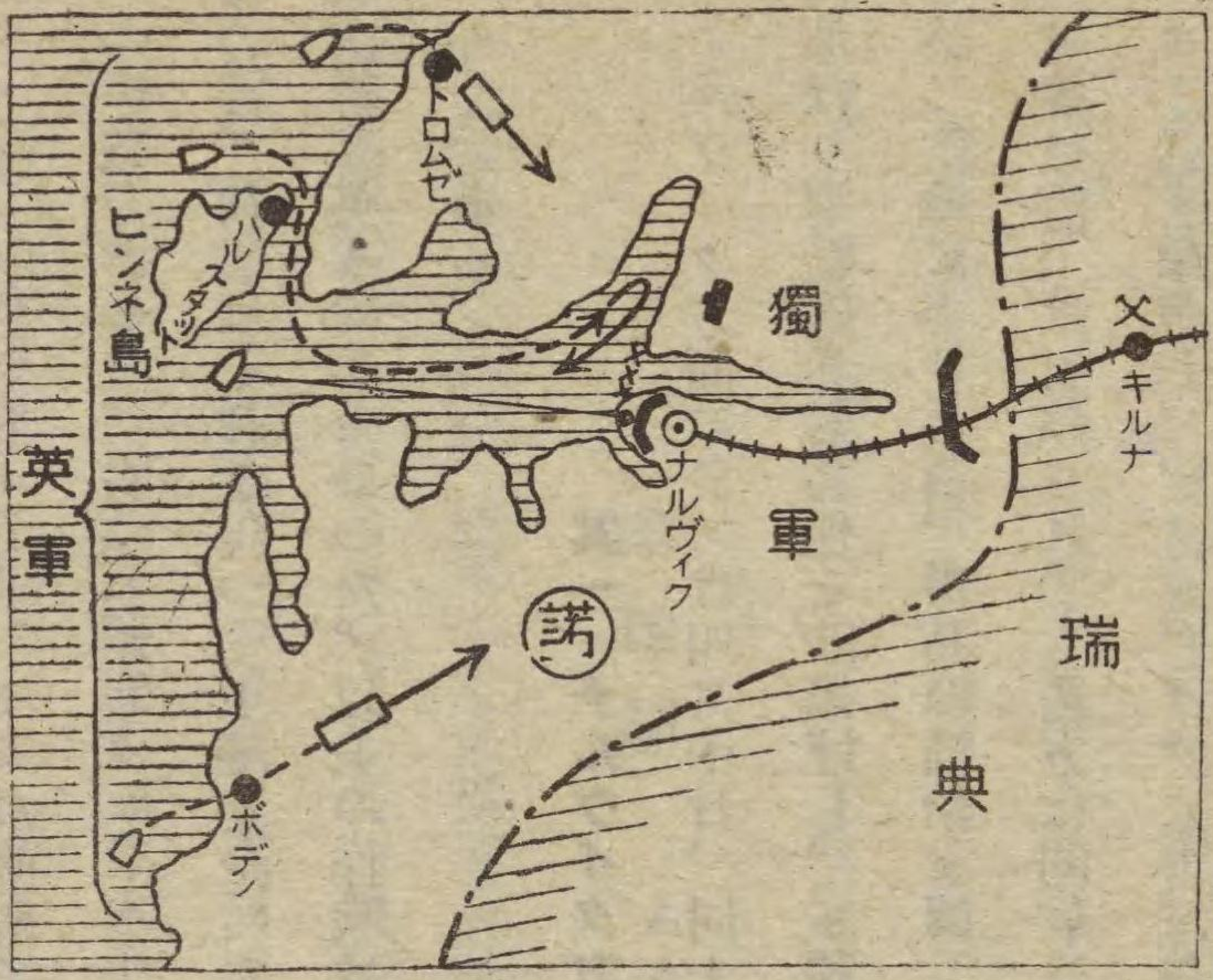
其一　ナルヴィク方面の戰（四月－五月）

ナルヴィク方面に於ては四月十日、同十三日の海戰に於て獨逸の戰艦は殆んど全滅に歸し、海兵は總て陸上軍に加はり軍艦の兵器其他を陸揚げし、艦體は之を灣口に横たへて敵艦侵入の阻害に供し全力を擧げて防禦の方策を講じ空輸により兵員、需品の補給を圖り死守を覺悟してゐた。

彼等は海上は封鎖されても後方は開放されてゐるので、此處に着目して勢力の擴張を圖り附近に蟠踞せるノルウェー兵を擊破して、ナルヴィクより瑞典に通ずる鐵道線路を占領して之を確保した。此の際ノルウェー兵若干を捕虜とし且つ其の武器庫を占領して小銃八千挺、機關銃三百十五挺を鹵獲して敵の來攻を待つてゐた。

英艦からの砲擊は連日に亙り行はれたが、四月十七日に至り微弱な英軍が始めてナルヴィク對岸の灣頭から上

陸を試みたが、同地守備の獨軍の爲め忽ち撃退する所となり、且つ陸揚げ準備中の英軍艦及び輸送船は獨爆撃隊の攻撃を受け多大の損傷を被り、其の潛水艦一隻は即時沈沒した。其の後英艦からの砲撃は絶間がないが、敢て積極的に上陸を決行するの模様がない。四月末頃に於ける兵力は英軍約五千、ノルウェー軍約三萬で、之に對する獨軍は山岳部隊と戰艦から上陸の海兵千數百名を合し約三千五百餘名で全く孤立無援の狀態にあつた。



ナルヴィクの戰

英軍側にてはナルヴィク附近への上陸は、迚も不可能と見てか、其の後遠隔せる北方トロムゼ、南方ボデノの地に英軍部隊を上陸せしめ、陸上にあるノルウェー軍と協同してナルヴィクの獨軍を南北より挾撃せんとし、各所に於て小戰鬪を惹起したが、遂に獨軍を破る能はずして荏苒日を送り、以て最後の敗戰となつたのである。(後述)。

其二　トロントハイムの戰（四月—五月）

英佛聯合軍がトロントハイムを南北より挾撃占領せんとしたことは前述した所であるが、それ迄にノルウェーに上陸した獨軍は如何なることを爲してゐたか。

其二　トロントハイムの戰（四月―五月）

英佛聯合軍がトロントハイムを南北より挾擊占領せんとしたことは前述した所であるが、それ迄にノルウェーに上陸した獨軍は如何なることを爲してゐたか。

【獨軍其後の行動】　獨軍は機先を制してノルウェー各要地の占領に成功したが、天然の地形上各地間の連絡は容易につかない。從つて各個擊破を被るの虞れは多分にあつた。それで本國から增援兵が海路或は空路により陸續として到著するに從ひ、各要地周邊の敵掃蕩、要塞の攻略、各地の連絡等に寧日なかつた。其の主なるものを擧ぐればオスロ東南のアスキ、フレデリックスタード、ハルデン等の諸要塞を攻略して八十三門の大砲其他多數の兵器を收め、且つオスロ東方のコングスビンガー國境要塞なども陷れてオスロ周邊の安定を圖り、それより鋒を西に轉じクリスチャンザンド、スタバンゲル間の連絡を通じ、又オスロとスタバンゲル及びベルゲン間の山地に出沒するノルウェー軍を攻擊して其の五千餘人を捕虜とし且つ多くの武器を鹵獲して殆んど其の蠢動を完封して此の方面の連絡を通じた。即ちオスロ――スタバンゲル、クリスチャンザント間は四月二十四日頃に、オスロ――ベルゲン間は五月二日頃に相通ずるやうになつた。

以上のやうな上陸地點の確保强化に奔命中、英佛聯合軍のトロントハイム挾擊の情報が傳はつたのである。

【英佛軍の行動】　四月十七、八日頃英佛軍約一旅團の兵はナムソスに、他の一旅團はアンダルスネスに、英艦隊の掩護により猛烈なる獨空軍の爆擊下を强行上陸したが、兩港灣の設備甚だ惡く多大の困難を嘗め、特に高射砲搭載の輸送船擊沈せられた爲め爾後の行動に重大なる支障を生じた。

ナムソス上陸部隊は逐次トロントハイムに向ひ前進を開始し、又アンダルスネス上陸部隊は鐵道を利用し一部を南方リレハンマー方向に派してオスロ方面より北上する獨軍の前進を阻止せしめ、主力を以てトロントハイム

方向に進み以てナムソス上陸部隊と相呼應してトロントハイムを占領せんと企圖した。蓋し同地を根據地とし强力なる兵力殊に重材料の揚陸並に航空基地を設定し以て爾後作戰の發展を企圖したものであらう。

一方トロントハイムに在る獨逸守備軍は、英艦の眼を掠めて海上から增兵し又空中輸送により增强するも其の兵力多くも五六千位の數に過ぎなかつた。之を以て英・佛・ノルウェーの聯合軍に對せんとする、實に累卵の危きに在つたと云はねばならぬ。されど彼は勇敢にも海軍小艦艇の援助の下に約百キロ進出し入江の東北端ステンケルの隘路を占領して之を確保した。之はナムソス方面から來る敵に對し屈强の前進陣地なのである。又東方への鐵道の國境驛メローケル附近にも一小部隊を分遣するなど戰略上出來るだけの部署をなした。かう云ふ點は獨軍に於て特に見得るので、つまり平素に於ける戰術教育が行き屆いてゐたからである。

【アンダルスネス方面】　オスロに在る獨軍のトロントハイム救援の行動を起したのは四月二十二日で二縱隊となつて前進した。

右縱隊は山岳部隊約二師團を基幹とし、之に小型戰車若干を屬し、左縱隊は山岳部隊約一師團を基幹とし之に稍々有力な機械化部隊、小型戰車を附屬せしめた。

右縱隊はエルヴルムを通過し溪谷を北上、四月二十五日頃テンセットとに達し、此處より一支隊を左方に分遣した。此の支隊は嶮峻なる山谷を越え不意にトロントハイムの南方オプダル附近に進出して鐵道を遮斷して南下した。之が爲めトロントハイム方面及びドンバス南方に進んだ英・諸軍は何れも其の背後に脅威を感じ之が動機となつてアンダルスネス方向に退却するの已むなきに至つた。而して右縱隊の主力はテンセットより北進し二十

稍々有力な機械化部隊、小型戰車を隨屬せしめた

右縱隊はエルヴルムを通過し溪谷を北上、四月二十五日頃テンセットとに達し、此處より一支隊を左方に分遣した。此の支隊は嶮峻なる山谷を越え不意にトロントハイムの南方オブダル附近に進出して鐵道を遮斷して南下した。之が爲めトロントハイム方面及びドンバス南方に進んだ英・諸軍は何れも其の背後に脅威を感じ之が動機

となつてアンダルスネス方向に退却するの已むなきに至つた。而して右縱隊の主力はテンセットより北進し二十七日レーロス北方に於てノルウェー軍必死の抵抗に遇ひ、之を擊破して四月三十日ステーレンに達しトロントハイム方面から來たる友軍と連絡し、茲にオスロとトロントハイムとの陸上交通が確保されることゝなつた。其の距離約七百キロである。

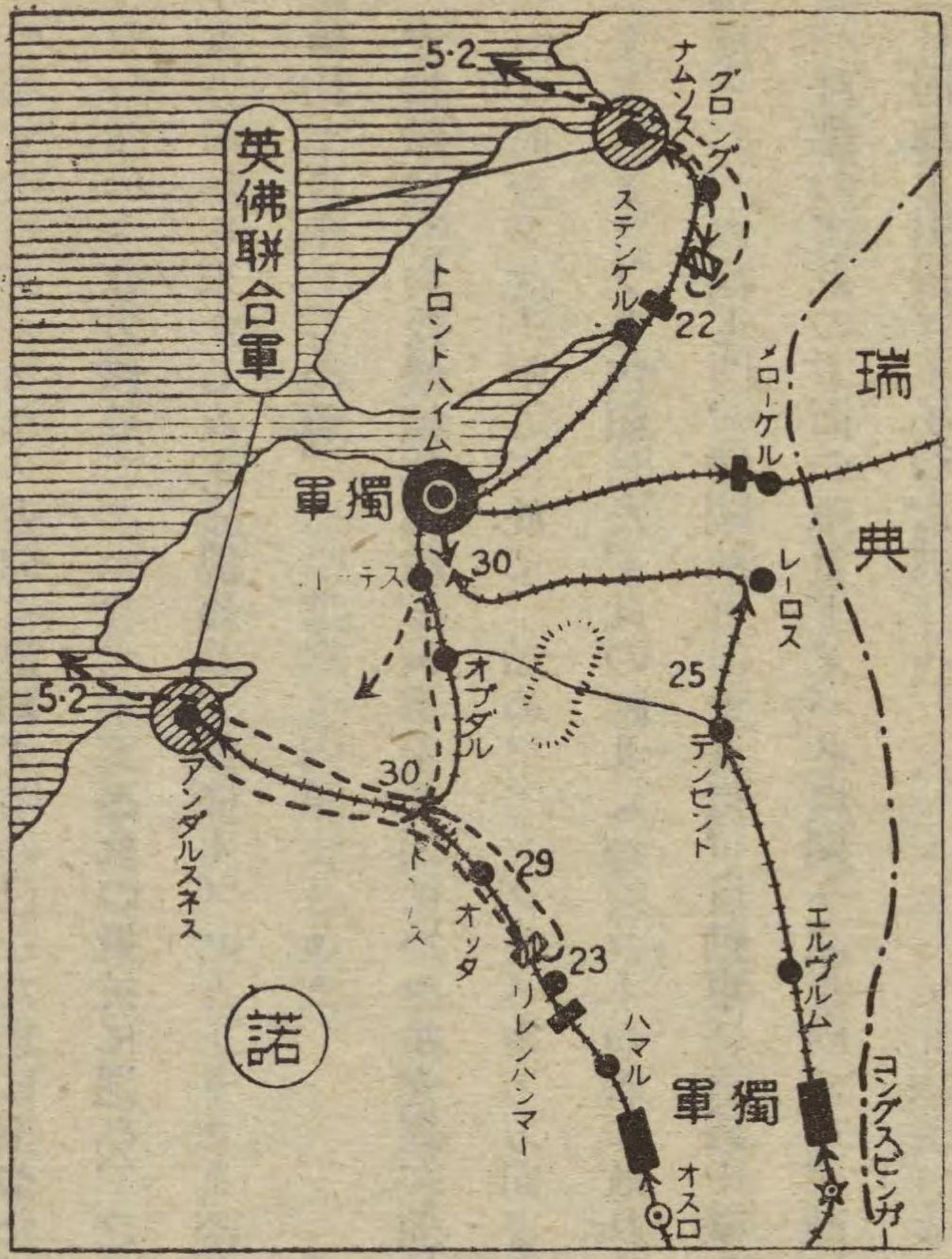
左縱隊は有力な機械化部隊と戰車を先頭にハマルを經て前進、敵の破壞した橋梁、道路を修繕しつゝ四月二十三日リレハンマー附近に於て、始めてアンダルスネス方向より南下せる英軍を含む大部隊と遭遇し之を擊破して二十九日オッタを占領した。此の時リレハンマーの戰に敗れ山中に遁入したノルウェー軍の投降あり約四千名を捕虜とし、大砲七門、機關銃百二十五挺、自動車二百五十臺を鹵獲した。四月三十日には前項右縱隊の分遣支隊と相呼應して此の方面の敵をドンバスに圍み之を破つた。敵は倉皇としてアンダルスネスに逃れ急遽乘船、五月二日同地を引揚げて了つた。

此の時獨空軍の猛爆を被り多大の損害を受けた。ノルウェー軍は窮して埠頭に於て獨軍に降り大砲五十門其他多數の兵器は獨軍の手に歸した。

【ナムソス方面】 ナムソスに上陸した英佛軍は、四月二十二日ステンケル附近に於て獨軍の爲め擊破せられ、グロングに於て又敗れ遂に五月二日急遽乘船して本國に走つた。此の時獨空軍の爆擊を受け廠營、倉庫、貯油設備は燒かれ、高射巡洋艦一隻は沈沒し大型巡洋艦一隻は大損害を受け、驅逐艦一隻、輸送船五隻其他の船舶五隻

は大破を被つた。

斯くて聯合軍はトロントハイム奪還に失敗して本國に遁走した爲め此の方面に在るノルウェー軍は全く抵抗の力を失ひ其の指揮官ゲツ大佐は、一言の挨拶もなく引揚げを行つた英佛軍の仕打に對し憤慨して、五月三日悲壯なる聲明を發して獨逸の軍門に降つた。英國の和蘭、白耳義、佛蘭西、ユーゴー、希臘に對する皆之と同樣の遣り口であつた。



トロントハイム附近の戰
（四月—五月）

ノルウェー皇帝以下、政治及び軍事の首腦者は英國に逃避した。玆に於て獨逸は五月四日トロントハイム以南の南部ノルウェーを占領することゝなつた。此の頃に於ける獨軍陸上兵力は約八師團位であつた。

英佛聯合軍の今回遠征の失敗は俄然世界に重大なる波紋を投げたが、特に英國に於ては當路に對する非難高く、玆に始めて陸海空三軍の作戰行動を一元化する

必要を痛感し、遂に海軍大臣チャーチル（後の首相）に對し其の指揮監督の最高權限を與へることゝなつた。首

必要を痛感し、遂に海軍大臣チャーチル（後の首相）に對し其の指揮監督の最高權限を與へることゝなつた。首相チェンバレンも遠征の顛末につき辯解の演説を行ひ、最後に「ノルウェー戰は未だ終結せず、今我々は同志相爭ふべき時ではなく、我が陣營を強化すべき時である」と、苦しい答辯を行つた。

其三　ナルヴィク最後の戰（五月―六月）

ナルヴィク地區に英軍の上陸を企圖したのは前述のやうに四月十五日以來であり、同地に在る獨軍に妨げられてゐたが、四月二十五日頃に至るや優勢な艦隊の掩護の下にナルヴィク東北地區に上陸し、ノルウェー軍と協力し遂に約二萬人の優勢な兵力を以て三千五百人の微弱な獨軍を壓倒撃滅しようと努めた。

此の孤立無援の獨軍は、約六倍の大敵により、海からも兩翼からも背面からも晝夜攻撃を受けたが、雪を冠つた巖壁に噛りついて寸地尺土をも敵に渡すまいと頑强に抵抗を續けた。敵は英軍の外に佛蘭西のアルプス獵兵、波蘭の山岳兵、ノルウェー第六師團の大部分からなり徐々に一歩一歩と攻め寄せて來る。當時獨軍は充分な火砲を持つてゐなかつた。それで海上からは艦砲で撃ち込んで來るので、どうにもならぬ。唯幸ひなことには空軍が連日人員及び軍需品を補給して有效に地上戰鬪に協力した。

やがて五月十日になると、獨逸が西方に大攻勢を執り戰力の大部を傾けて決戰を求めた。世界の耳目は悉く其の方面に向けられ、ノルウェー作戰は一寸忘れられた觀があつたが、寒風吹き荒み冷雨注ぐナルヴィクには依然として戰鬪が續けられ、英國は大帝國の面目を賭して力攻し、新手を補充して益々攻撃を强化

する。獨軍の運命も遂次危險に陷つたが、一方英軍も亦獨空軍の活動に妨げられ、多大の損害を受けた。

ナルヴィクの此の危急を救はんと、丁度前述のトロントハイム周邊の戰に參與した獨軍の一部はナムソス陷落後直ちに行動を起し、英・諸軍の抵抗を排除しつゝ奇巖怪石累々として、全く不毛なるアルプス的高原の道なき地區を跋涉し五月六日モシエンに達し、同二十一日にはモーに達し此の附近から飛行機を以て山岳兵をナルヴィクに輸送した。此の間ナルヴィク守備の獨軍は優勢なる聯合軍の壓迫に堪へず、五月二十八日遂にナルヴィク市街を拋棄するの已むなきに至つたが、尙ほロンバッケン入江兩岸の山々と鐵鑛運搬鐵道とを死守して、こゝを先途と防戰を續けた。

一方救援軍は急行、敵を驅逐しつゝ五月三十一日フアンスクに達し、六月十日には漸くトロントハイムを距る北方五百キロの要津ボデノに達したが、遂にナルヴィク奪回（後述）には間に合はなかつたが、此の救援軍の比類なき難行軍は特筆せねばならぬ。

ナルヴィク攻擊の聯合軍（英軍、佛軍、波蘭軍、ノルウェー軍等）は優勢を利用してナルヴィクを奪取したが、獨軍の抵抗頗る猛烈を極め殊に空軍基地をノルウェー內地に設置した獨逸爆擊機の活動が日を逐ふて目覺しく、從つて英國艦船の損害益々加はり且つ獨軍は空輸により增兵すると共に救援軍も漸次接近して彼我の形勢逆轉せんとするの情況となつた。

しかも此の頃、歐洲の西方戰場では獨軍は難攻不落の稱ある佛白國境の陣地帶を突破し、白耳義の野に古今未曾有のダンケルク大殲滅戰を成就して大勝利を博し（六月四日）英國遠征軍は殆んど全滅の悲運に會したので英

従つて英國艦船の損害益々加はり且つ獨軍は空輸により增兵すると共に救援軍も漸次接近して彼我の形勢逆轉せんとするの情況となつた。

しかも此の頃、歐洲の西方戰場では獨軍は難攻不落の稱ある佛白國境の陣地帶を突破し、白耳義の野に古今未

曾有のダンケルク大殲滅戰を成就して大勝利を博し（六月四日）英國遠征軍は殆んど全滅の悲運に會したので英國は茲に戰爭指導方針に一大變革を要するに至り、ナルヴィク地區の戰爭を打ち切り、其の軍隊を撤退せしめることゝなり、六月九日巧に撤退を終つた。

此の敵聯合軍の撤退に乘じ、戰艦シャルンホルスト及びグナイゼナウを含む獨逸海軍は危險を冒して、英兵を滿載して引揚中の航空母艦グローリャス（二萬二千五百噸）及び護衛の驅逐艦二隻、其の外運送船約三萬噸を擊沈したのは特筆すべき戰果であらう。

斯くて獨軍は再びナルヴィクを占領し、其の對岸のエルヴェガルモエンをも奪還し、六月十日獨軍司令部とノルウェー軍との間に休戰條約の締結を見、殘存諸部隊の武裝解除となり、茲にノルウェー戰役の終局を告げたのである。

ヒットラー總統はナルヴィク死守の殊功を嘉し獨逸國民の名に於て謝辭を呈し、最初の柏葉鐵十字騎士章を陸軍中將ディートルに授けた。ディートル麾下のナルヴィク占領部隊が全く本國との地上連絡を絕ち殆んど六倍優勢の聯合軍と特に强力なる敵艦隊とのため四面から攻擊せられ、約二箇月の間頑强な防禦を行ひ遂に敵をして撤退せしめるに至つたのは戰史に其の名を輝かすものである。

其の能く之を爲し得しめたのは無線電信による本國との連絡があつた爲めであることは勿論であるが、最も重要な原因は優勢な獨逸空軍の協力の賜である。即ち有らゆる軍需品が飛行機によつて追送せられた許りでなく增

加入員は悉く落下傘によつて降下したのである。しかも是れ等人員が所謂落下傘部隊のものでなく（落下傘部隊は西方戰場の大攻勢に充當せらる）殆んど練習を積まざる普通の兵士であつたことは注意に値する。之も畢竟平素に於て直接、間接國民に航空知識並にそれに關する練習を奬勵指導した賜に外ならぬ。

其四　戰　果

ノルウェー戰爭に關する戰果は未詳の點多いが其の概要は次の如くである。

兵力は最大數に於て獨軍は約八個師團とされてゐる。聯合軍側は英、佛、ノルウェー、波蘭、加奈陀等の兵が逐次出入してゐるから不明であるが、ノルウェー六個師團、其他約三、四師團と推測される。以上は陸軍であるが、海軍は英國側優勢、空軍は獨逸の方優勢である。

損害は獨逸側は戰死約千三百、負傷約千六百、行衞不明約二千四百で合計約五千三百とされてゐるが、實際は是れ以上であらう。聯合側の方は不明であるが、ノルウェー軍は死傷、捕虜等により全滅と見るべきである。

獨逸艦船の損害は巡洋艦三隻以下沈沒諸艦計三十五隻、損傷五隻、合計約四十隻と云はれてゐるが、英國側では之を約六十隻と發表してゐる。

英國艦船の損害は戰艦一隻沈沒の外諸艦船の沈沒損傷合計約二百五十隻、約五十萬噸と見られるが、英國の發表數は之より遙かに少い。兎に角多大の損害を受けたことは確かであらう。

空軍は獨逸の損害は約百二十機で、獨機の擊墜した英國飛行機は航空母艦のものを除き八十七機と發表されてゐるが、實際は是れ以上であらう。

英國艦船の損害は戰艦一隻沈沒の外諸艦船の沈沒損傷合計約二百五十隻、約五十萬噸と見られるが、英國の發表數は之より遙かに少い。兎に角多大の損害を受けたことは確かであらう。

空軍は獨逸の損害は約百二十機で、獨機の擊墜した英國飛行機は航空母艦のものを除き八十七機と發表されてゐるが、實際は是れ以上であらう。

第五節　評論

【其一、獨逸】　獨逸は恫喝を以てノルウェーを屈服させる積りであつたが、それが出來ず、とうとう强引の手に出で寒冷不毛の地に、約八師團の兵を送り激戰二箇月の後全くノルウェーを占領したことは作戰上からすれば陸海空三軍の武威を輝かしたものである。即ち寒冷と天嶮とを冒して行つた果敢な上陸作戰及び其の後の軍事行動は戰史を飾るものと謂ひ得るであらう。

唯獨逸が、丁抹、ノルウェーの中立國二つを奇襲的に占領したことは國際法からすれば或は論難される點であるかも知れないが、前に述べた如く條約の違反、協定の破棄等が平氣に行はれ、國際道義の廢れた今日、愚直を守るは國を亡ぼすなりとの觀念が歐洲一般の通念となつて居る現狀であれば、强ひて獨逸を以て中立蹂躪の叛逆者と云ふことは出來まい。若し獨逸之を爲さざれば英國之を破るや必然である。さうなると中立侵犯の是非を斷ずる前に先づ以て中立なる者の正否を檢討せねばならぬことゝなる。故に此の問題の如きは餘り深入りせざるを可とする。要するに獨逸は英國より十二時間早くノルウェーを占領することが出來たので北方に勢力を擴大し全般の形勢を有利に導き得たのである。而して其の結果は何れかと云へば丁抹もノルウェーも却つて其の恩澤に浴し戰前に優る光榮の國家生活を營むことが出來たやうである。

獨逸がノルウェーを占領することにより、シェットランドまで約三百浬、スカパ・プロー軍港まで約二百七十浬となり、飛行距離は殆んど從來よりも半減するに至つたので英本土を一層容易且つ有利に空襲することが出來るやうになつた。

又ノルウェーの占領は、英國のノルウェーとシェットランドとを結んだ對獨海上封鎖線を切斷したことゝなつたから、獨逸は今後ノルウェーを利用して比較的容易に海洋に出動することも出來、從つて英國に對する逆封鎖、潛水艦の遠洋進出なども容易になり戰爭遂行上重大なる利益を收めた。

つまりノルウェーの占領は空軍を以て英國を包圍的に襲擊し得るの利と、英國海軍の活動を制し得るの利とを收めた譯で、戰略的側面陣地を占據したと云ふことになつたのである。

次には獨逸がノルウェー、丁抹等北歐の諸國を制する事となつた爲めに（瑞典はヒットラーに請ふて中立を保障された）、從來同方面から英國に流れてゐた農產物、木材、鐵鑛等を押へて、玆に獨逸の希望する所謂獨逸を中心とする歐羅巴共榮圈の確立の地步を進めた事となつた。

ノルウェー戰の花形は何と云つても獨逸の飛行機であり空軍將士の善戰である。彼等は英國大海軍の約六分の一の勢力しかない小海軍を以て英艦隊の鼻先きを掠めてノルウェーの兵要基地數箇所を一足先へ失敬してしまつた。優勢な英海軍を恐れずに總計二百三十萬噸の海上輸送を大した支障もなく遂行してのけた。此の敵前の大輸送が艦隊の掩護下に行はれたのは論を俟たないが、又空軍の勇猛なる活動に負ふ所が頗る大である。五月三日ナ

一の勢力しかない小海軍を以て英艦隊の鼻先きを掠めてノルウェーの兵要基地數箇所を一足先へ失敬してしまつた。優勢な英海軍を恐れずに總計二百三十萬噸の海上輸送を大した支障もなく遂行してのけた。此の敵前の大輸送が艦隊の掩護下に行はれたのは論を俟たないが、又空軍の勇猛なる活動に負ふ所が頗る大である。五月三日ナムソス灣に於て英の一戰艦を爆沈して全世界に向つて飛行機の威力を示し、又ベルゲン及びオスロの海岸砲臺を降伏さしたのも落下傘部隊や急降下爆擊機の働きであつた。懸軍長驅してナルヴィクを占領した遠征軍が孤立無援、優勢な敵の重圍の裡に丸二箇月を頑張り通し得たのも全く空軍の決死的空輸のお蔭である。ナムソスに於ても、アンダルスネスに於ても、敵の上陸又は乘船の際、人馬及び船舶に與へた損害は戰慄すべきもので、ダンケルクの夫れに似たものであつた。

獨逸空軍の敵に與へた損害は敵航空母艦積載の分を除き、敵の飛行機八十七機、擊沈したのは軍艦及び補助艦二十八隻約九萬噸、商船七十一隻約二十八萬噸である。以上の外軍艦及び補助艦八十隻、商船三十九隻に爆彈を投下して大なる損害を與へた。卽ち飛行機の行動半徑內では如何なる艦船も決して安全では有り得ないことを如實に示した。

【其二、英國】 英・諸聯合軍が地の利を占めながら屢々敗退したのは彼等が弱かつたと云ふよりも獨逸が强かつたからであらう。彼等は何故に思つたより弱かつたかと云へば訓練や裝備のことは別にして其處に二つの缺陷があつた。一は統帥、一は混成である。英國の統帥部の通弊は與國の兵力を驅使して自分は常に最少の努力しか拂はぬことである。其の一例として折角戰略的に立派に畫いたトロントハイム挾擊の作戰が戰術的に滅茶苦茶に打ち破られてしまつた。之れは能はざるに非ず、爲さざるなりと評する外はない。

他の一は混成である。彼等の軍隊には英人あり、佛人あり、ノルウェー人、波蘭人、加奈陀人等々があつて協

同の精神乏しく、個々別々の行動に趨り易く、從つて兵數多くも其の力少なく、ナルヴィクの戰に於ては獨軍に對し六倍の優勢を以て有利の態勢にありながら遂に失敗してしまつた。其他の戰に於ても常識的に見て勝つべきに負けたりしたのは皆此の混成部隊の弊であつた。ナムソス及びアンダルスネスの退却乘船の場合はノルウェー軍に何等の通報もせず、置き去りにしたあたりは皆此の他人扱ひの疎情から出たものである。勝ちいくさの時は混成軍の弊害も出ないが、負けいくさ、殊に難戰苦鬪の時には其の弊が出て來てバラ〳〵になるものだ。昔から樂は偕にし得べくも苦は倶にすること難しと云はれてゐる。

英海軍は近來ネルソン時代のやうな、勇猛果敢な行動を見せないが、今回の戰に於ては比較的善く戰つたやうだ。これノルウェーは平時から英國の勢力範圍と云つても差支へない程密接な關係にあつたから、特に勇氣を出したものであらう。彼等はノルウェー南方のスカゲラック灣に進入して獨の艦船を撃たんとした潛水艦の喪失だけでも十九隻の多きに上つた。又ナルヴィク灣内に突入して獨逸驅逐艦四隻、運送船六隻を撃沈して獨逸艦隊を全滅させた勇氣は英海軍魂の尙ほ健在せる一例でもある。しかし彼等は勇に任せて水路の狹い峽灣内に侵入し、精鋭なる獨空軍の好目標となつて大なる損害を受けたのは對空戰の研究不充分なるを示したものである。

英國が獨逸に機先を制せられたのを油斷と評するは少しく酷であるかも知れない。普通の常識では小海軍の獨逸が眞逆、英大海軍の眼を掠めて獨逸沿岸からノルウェーのナルヴィクまで、二千キロも飛躍突進するとは思ひもよらざる所で、米人が日本海軍の布哇襲撃を豫想せざるよりも尙更想像外のものであつた。英國は波蘭やチェ

精鋭なる獨空軍の好目標となつて大なる損害を受けたのは對空戰の研究不充分なるを示したものである。
英國が獨逸に機先を制せられたのを油斷と評するは少しく酷であるかも知れない。普通の常識では小海軍の獨逸が眞逆、英大海軍の眼を掠めて獨逸沿岸からノルウェーのナルヴィクまで、二千キロも飛躍突進するとは思ひもよらざる所で、米人が日本海軍の布哇襲擊を豫想せざるよりも尚更想像外のものであつた。英國は波蘭やチェッコや芬蘭には約に背いて援軍を出さないし又內心では其の考へもなかつたらうが、此のノルウェーだけは指一本誰にも指させまいと自信を持つてゐたのである。海軍大臣チャーチルも斯く信じてゐた。たとひ獨逸には幾ら飛行機があつてもそんな無謀なことは出來まいと高を括つてゐた。つまり英の大海軍を以てせば何かあらんと例の倨傲をきめ込んでゐたのである。それが皆當てが外れて、あべこべに海軍は大損害を被むり上陸軍は到る所に破れ、意外な落下傘部隊の大活動を見せつけられ、高射砲を積んだ船舶は擊沈されると云ふ有様で飛行機の大威力には今更の如く驚き、之では到底望みがない、愚圖々々してゐると全滅の悲運に陷ると、傲岸な英國も遂には恥を忍んでノルウェー作戰を打ち切つてしまつた。斯くて本戰役は英海相チャーチルにとつては第二のガリポリとなつたのである。第一次世界大戰に彼は無理押しにガリポリ上陸戰を强行して失敗し、今又ノルウェーの上陸に失敗を喫した。

しかしガリポリ半島は到る所要塞でそれに向ふ敵前上陸であつたが、ノルウェー沿岸は何れかと云へば敵なき所に上陸し得る地點が幾多もあつた。故に若しも當時英國にナポレオンの如き、又はマッケンゼンの如き名將がゐたならば巧みに上陸を敢行して獨軍を各個に擊破し得たであらう。英軍の急務とする所は既に上陸せる獨軍を擊攘するよりも先づ安全に上陸し、其處に確固たる據點を作り速かに空軍基地を設定することであつた。

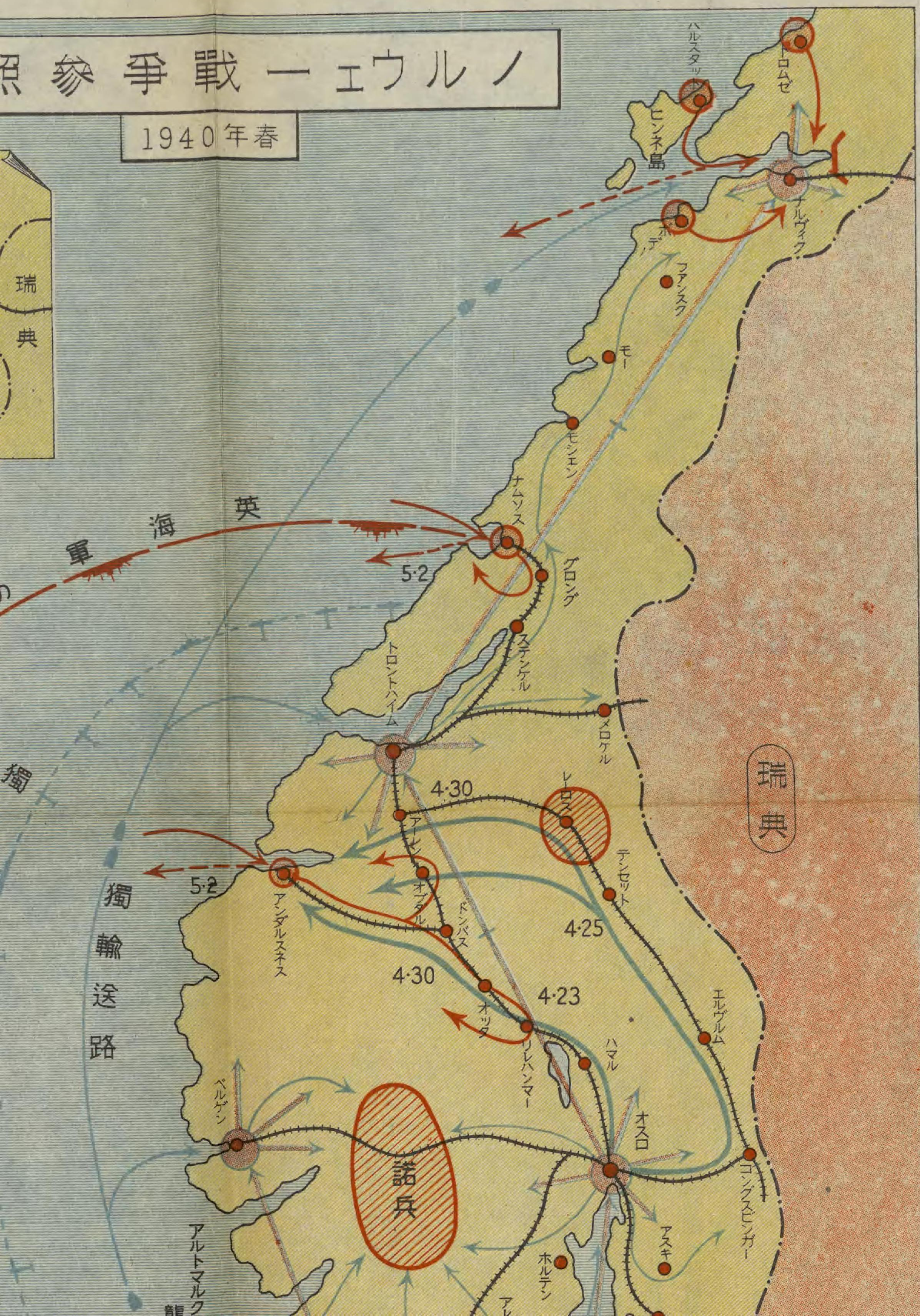
然るに英國は其の聯合の優勢を恃んでか、ナムソス或はアンダルスネスに無事上陸すると共に直ちに攻勢を執つたが、遂に敗れて上陸地點をも失ひ殲滅的打擊を受けたのである。輕率なる作戰と云はざるを得ぬ。

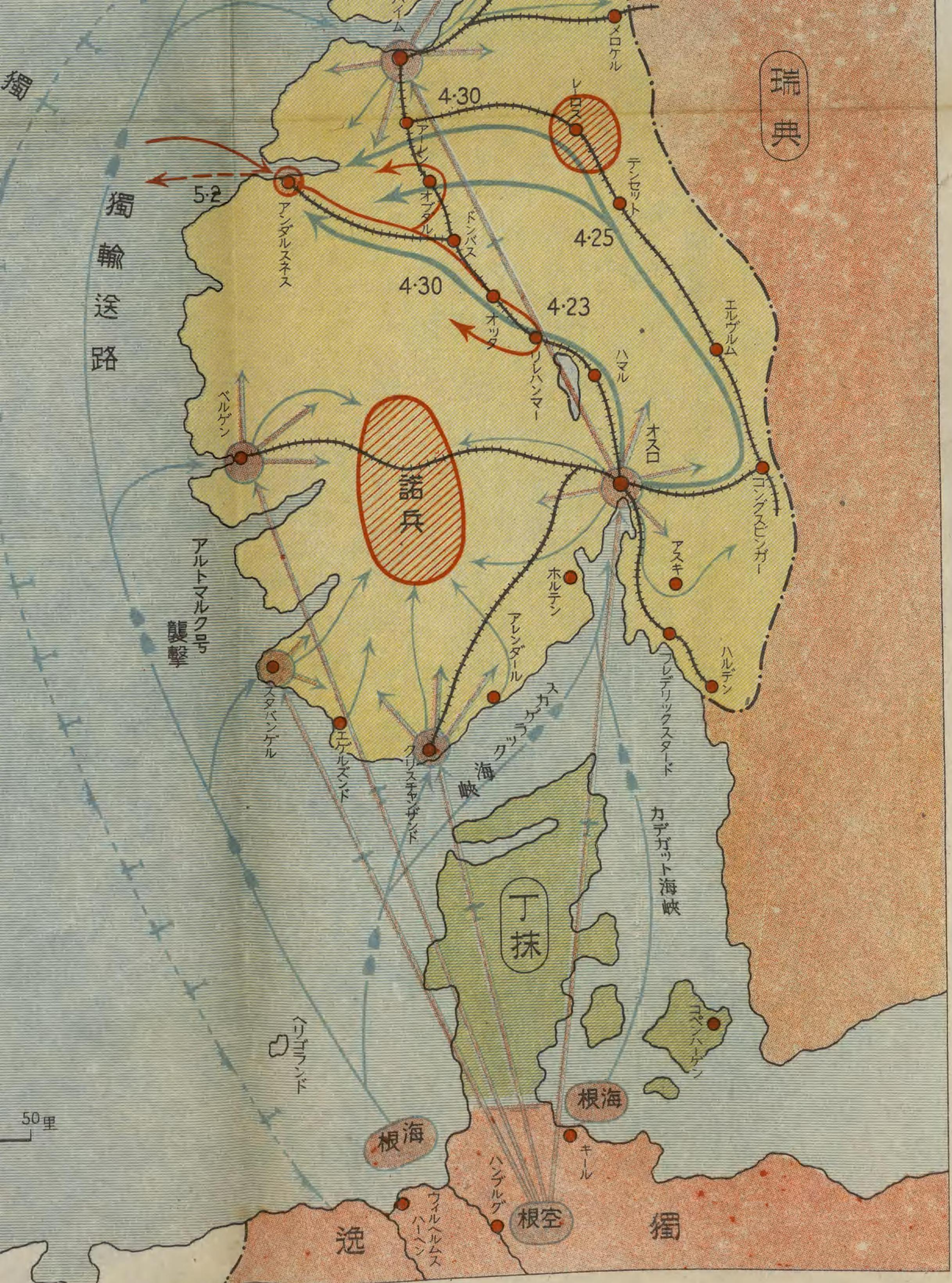
彼等は獨軍の餘りに突飛的な奇襲に度膽を抜かれ、平素の沈著にも似ず狼狽して焦躁に陥り、功を早く收めんとした處に失敗の原因があつた。

世に槍襖と云ふことがある。今回の戰に於て獨軍がノルウェーに一大飛躍を斷行する爲めには艦船襖と飛行襖の二つを空中と海上に作り其の掩護の下に何千キロと云ふ長距離を突進してノルウェーの主要沿岸を占領したのである。彼等は決して無謀の擧をやつたものでなく用意周到、新戰略の極致を實行したものである。世人の中には獨軍の「山」が當つたと云ふものもあるが、それは誤りである。科學獨逸の仕事には「山」はないのである。

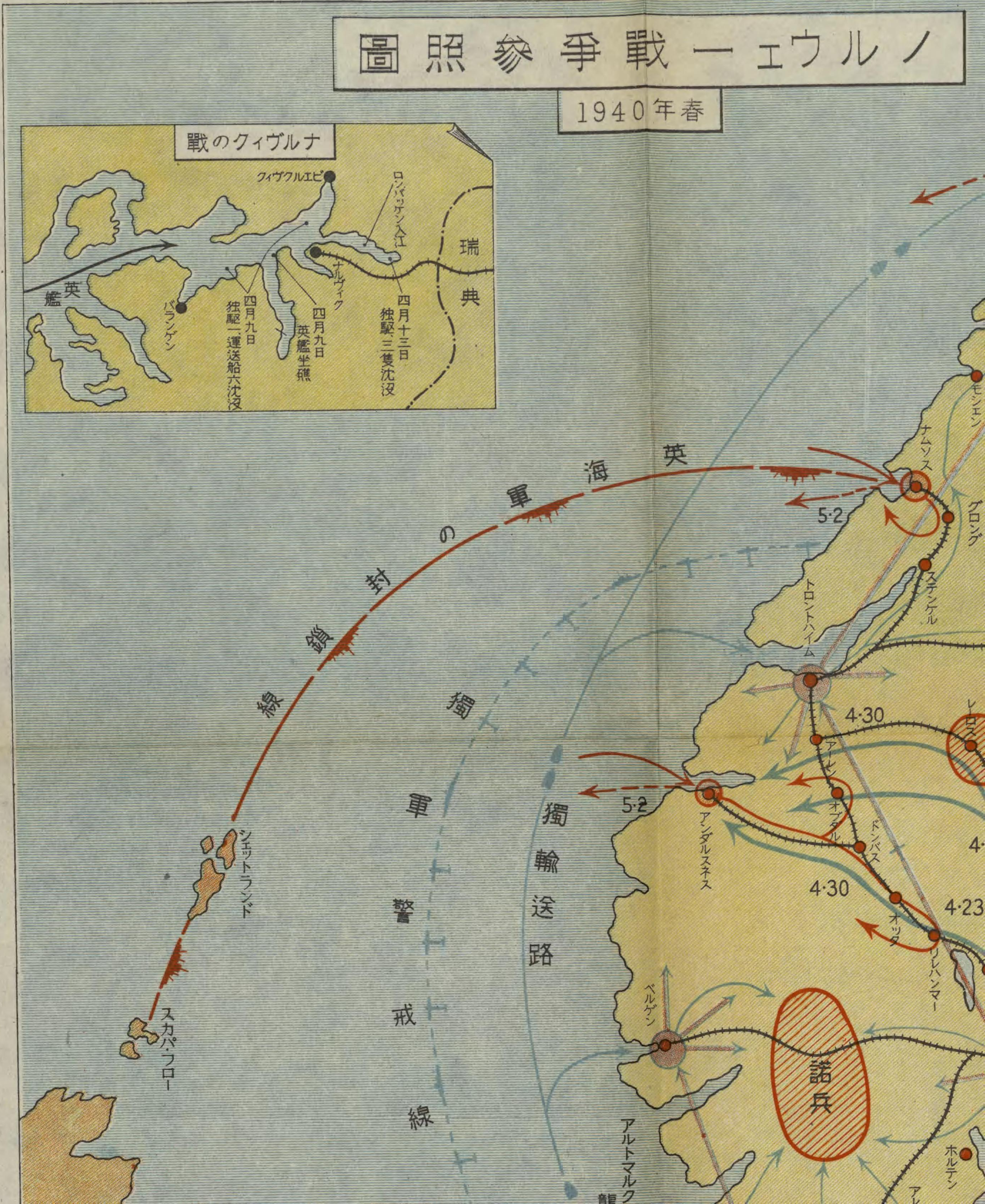
之に反し英國は獨逸を以て油斷のならぬ强敵と見てゐると共に、一面には「獨逸何するものぞ」と云ふ輕侮心をも持つてゐた。此の考へはノルウェー戰に於て彼の失敗を喫した主因となつた。「マサカそんな事はあるまい」、「よもやそんな事はなからう」と思ふのは危險である。「マサカ日本は宣戰はしまい」、「よもや日本は布哇を襲擊はしまい」と思つた米英の其の後の狀態を見ると、皆箴誡の教訓を示してゐる。

ノルウェー戰は小戰ではあるが戰略、戰術上研究すべき價値の多い戰爭である。

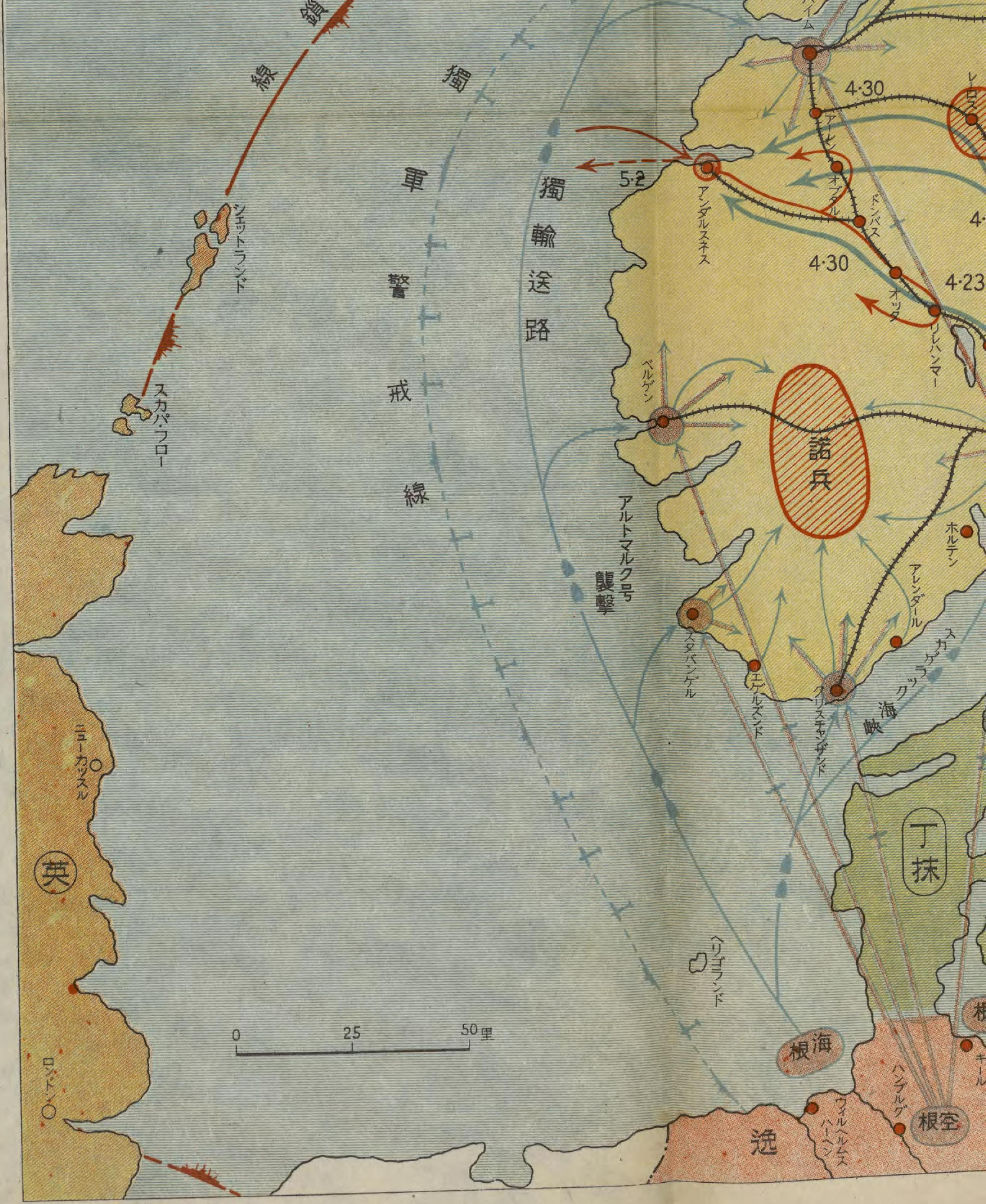

ノルウェー戦争参照
1940年春
トロムセ
ヒンネ島
ナルヴィク
ファンスク
モー
モシェン
ナムソス
グロング
ステンケル
トロントハイム
メロケル
レーロス
アンダルスネス
オプダル
ドンバス
テンセット
エルヴルム
オッタ
リレハンマー
ハマル
オスロ
コングスビンガー
ベルゲン
アスキ
ホルテン
英海軍
獨輸送路
諾兵
瑞典
5·2
4·30
4·25
4·23



獨
メロケル
瑞典
4·30
レロス
テンセット
5·2
アンダルスネス
ドンバス
4·25
4·30
4·23
オッタ
リレハンマー
ハマル
エルヴルム
獨輸送路
ベルゲン
オスロ
コングスビンガー
諾兵
アスキ
ホルテン
アルトマルク号襲撃
アレンダール
ハルデン
フレデリックスタード
スタバンゲル
エゲルズンド
クリスチャンサンド
スカゲラック海峽
カデガット海峽
丁抹
ヘリゴランド
コペンハーゲン
根海
根海
キール
ハンブルグ
根空
ウィルヘルムスハーヘン
逸
獨
50里



ノルウェー戰爭參照圖
1940年春
ナルヴィクの戰
ビエルクヴィク
ロンバッケン入江
瑞典
英艦
ナルヴィク
バランゲン
四月九日 独駆一運送船六沈没
四月九日 英艦坐礁
四月十三日 独駆三隻沈没
英海軍の封鎖線
獨軍警戒線
獨輸送路
シェットランド
スカパ・フロー
モシェン
ナムソス
グロング
5·2
ステンケル
トロントハイム
4·30
レーロス
アーレン
オプダル
ドンバス
アンダルスネス
5·2
4·30
4·23
オッタ
リレハンマー
ベルゲン
諾兵
ホルテン
アルトマルク



線
獨軍警戒線
獨輸送路
5·2
アンダルスネス
4·30
オプダル
ドンバス
4·30
オッタ
4·23
リレハンマー
シェットランド
スカパ・フロー
ベルゲン
諾兵
アルトマルク号襲撃
ホルテン
アレンダール
スタバンゲル
エゲルスンド
クリスチャンサンド
スカゲラック海峡
丁抹
ヘリゴランド
根海
根空
ハンブルグ
ウィルヘルムスハーヘン
逸
ニューカッスル
英
ロンドン
0
25
50里

第五章　西部戰線（一九四〇年五月—六月）

一九三九年九月一日に第二次世界大戰の火蓋を切つた波蘭戰爭は僅々十八日間で片づくと、今度は此の年の十一月に芬蘭戰爭が起り、それが翌一九四〇年の春三月に終ると、翌四月九日からはノルウェー戰爭となつて戰の火車はそれからそれへと廻りて熄む時はない。

波蘭戰爭後虎の如き獨逸が、どの方面に其の鋭鋒を向くべきやは世界の注目する所であつた。一般の觀察では徒らに戰線を擴張することは獨逸にとつて不利だから、少くも今の處、ノルウェーを完全に確保した後でなければ新しい軍事行動には移るまいと見られてゐた。殊に和蘭、白耳義への侵入は米國の參戰を促すことになり、藪蛇の惧れがあるから容易に行はれまいと云はれた。

然るに此の一般の豫想に反し今尚ほノルウェー戰爭の行はれつゝある五月十日獨軍は俄然例の電擊的大攻勢に出で、決河の勢ひを以て和蘭、白耳義、ルクセンブルク三國に侵入したのである。玆に於て昨年の宣戰以來膠著してゐた西部戰線は俄然一大活動を始め、大戰は愈々本格的段階に到著するに至つたのである。

第一節　大戰勃發後の狀況

多少前後の嫌ひあるが、順序として大戰勃發後に於ける西部戰線の狀況を概說する。

獨軍は一九三九年九月波蘭作戰を實施するに當り三十七師團を西方國境に配置して背後を掩護せしめた。然るに英佛軍は之に對し何等積極的行動に出でず、唯英國の飛行機が數回和蘭の中立を侵し同國の領空を飛んで獨空に侵入して空襲を行ひ多少の損害を與へた。之に對し獨逸も報復的空襲を英國に加へ、其の戰艦などに爆彈を命中させて損害を與へ、又獨潛水艦は英海軍根據地スカパ・フロウ軍港に潛入し、戰艦ロ－ヤル・オ－ク（二萬九千噸）を擊沈し、巡洋戰艦レパルズ（三萬二千噸――後マライ沖の海戰に日本海軍の爲め擊沈さる）を雷擊して大損害を與へた。

又英國は獨逸封鎖に全力を盡すと、獨逸は之に酬いるに潛水艦を以て英國側の通商破壞を企て却つて敵を苦しめると云ふ有樣であつた。

陸上正面に在つては佛軍は波蘭戰牽制の擧に出でず、頗る緩慢消極策に出で漸く九月八日頃より小兵力を以て獨佛國境を越えザールブリュッケン附近に進出したが、獨逸が波蘭戰爭を終へ其の兵力を西方へ輸送するを見るや、佛軍は兵を撤して國內に退き、十月中旬頃には一兵をも獨逸國境內に止めなかつた。

英佛軍の行動が以上のやうに消極的であつたから獨逸は思ひの儘波蘭作戰を遂行することが出來たのである。

此の作戰の終ると共に十月初旬から大擧兵力を西方に移動し、交通網發達せる關係上僅々五日間を以て、移動を完了し西方攻勢の準備に取り掛かつたが、政治、經濟上殊に天候不良、冬の氣溫低下のため來春まで攻勢を延期し例のジ－グフリ－ド線に據り、敵情の搜索、演習教練、特に攻擊案に基づく實地訓練、戰略、兵棋の研究、命令傳達法等の練習等に努めた。

英佛軍の行動が以上のやうに消極的であつたから獨逸は思ひの儘波蘭作戰を遂行することが出來たのである。此の作戰の終ると共に十月初旬から大擧兵力を西方に移動し、交通網發達せる關係上僅々五日間を以て、移動を完了し西方攻勢の準備に取り掛かつたが、政治、經濟上殊に天候不良、冬の氣溫低下のため來春まで攻勢を延期

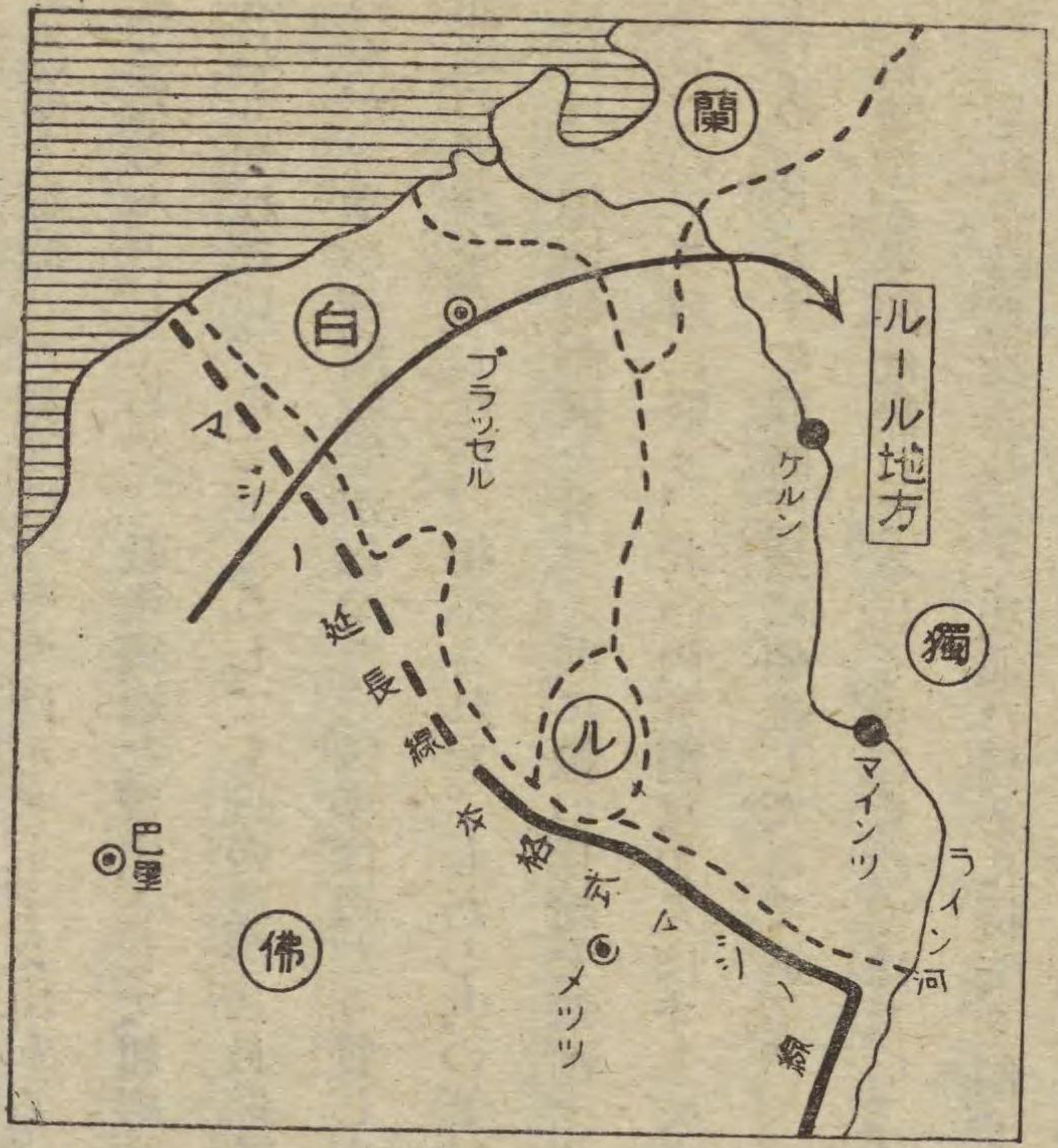
し例のジーグフリード線に據り、敵情の捜索、演習教練、特に攻撃案に基づく實地訓練、戰略、兵棋の研究、命令傳達法等の練習等に努めた。

波蘭を征服した獨逸は今や西はボゲーゼン山から、東はブグ河に達する大領土の裡に一億の人口を擁する一大國とならんとしてゐる。戰後獨逸を盟主として組織せられんとする歐洲の新體制には英國は除外される運命になるかも知れない。そこでどうしても此の戰爭には勝ち拔かねばならぬと英佛兩國は獨逸を苦しめる術策を講じてゐたが、幸ひ芬蘭戰爭が起つた。彼等は得たり賢しと芬蘭救援と云ふ好口實の下に十萬の出師準備を整へ瑞典國通過の要請を爲した所、拒絶された。しかし其の實は芬蘭を救ふにあらず、瑞典に進駐して其處の鐵鑛資源を占領し以て獨逸の側面を脅すと共に鐵の供給を遮斷せんとする一石二鳥の案であつた。然るにそれが瑞典の拒絶となつたので失敗に終り、其の內芬蘭は力及ばずして蘇聯に屈伏し媾和して了つた。斯くて戰線を擴大して獨逸を苦しめようとする謀略は玆に頓挫したのである。

執拗なる英佛は決してそれで止むものではない。今度はノルウェー方面に問題を起して獨逸を苦しめんとしたが、是れ亦前章說述の如く獨逸の爲めに機先を制せられ散々な目に遇つた。そこで英國ではチェンバレン內閣が退場して硬骨チャーチル內閣が現はれ、佛國では之より先きダラディエ內閣倒れ、親英派のレイノー內閣が出來て打倒ヒツトラー、打倒ナチズム、打倒獨逸政策を遂行せんとした。

英佛が戰線を擴大して獨逸を窮迫に陷れんとする企圖は一再ならず失敗した。されどこの儘引込む譯には行か

ぬ。然らば國境に蟠まるジーグフリード線を突破して獨逸に突入しようか、否々、此の線は北は和蘭から南は瑞西の國境まで蜿蜒四百吉米の長さに及び、此の間に二萬有餘のトーチカを列べ、近代技術の粋を集めた新式築城で、マジノ線よりも一層强固で、文字通り難攻不落の處女要塞線である。以前の世界大戰に於けるヴェルダンの



ルール侵入策

血腥き經驗に徴しても先づ百萬の生靈を軍神の祭壇に捧げる覺悟なしには手の出しやうがない。之は一寸出來ない相談である。然らばどうするかと云ふのだ。

彼等の眼の着いたのは獨逸の工業地帶ルール地方の襲撃である。幸ひ獨逸と和蘭との國境には堅固な陣地も無いから、此の方面から突入しようと云ふのである。一度ルール地方を占領せんか、兵器製造能力の大半を失はしめ得るを以て獨逸に大打撃を與へることゝなるのである。流石に獨逸はこんなことあらんを慮り大兵をアーヘン方面に集中して警戒する所あつた。

斯うなると一番憐れなのは獨、英、佛三國の間に介在せる和蘭、白耳義、ルクセンブルグの三小國である。そこで白蘭兩國では其の戰禍を避けんと屢々平和の提議を試みたが勿論無效であつた。それで其の中立を維持せんが爲め和蘭は陸軍兵の休暇を取消し歸休兵、豫備兵の召集を行ひ、海上警備を嚴にし、氾濫の措置を講じて防備

ること丶なるのである。流石に獨逸はこんなことあ

らんを慮り大兵をアーヘン方面に集中して警戒する所あつた。

斯うなると一番憐れなのは獨、英、佛三國の間に介在せる和蘭、白耳義、ルクセンブルグの三小國である。そ

こで白蘭兩國では其の戰禍を避けんと屢々平和の提議を試みたが勿論無効であつた。それで其の中立を維持せんが爲め和蘭は陸軍兵の休暇を取消し歸休兵、豫備兵の召集を行ひ、海上警備を嚴にし、氾濫の措置を講じて防備の强化を圖り、白耳義も亦英佛參謀本部と相謀り西境屯在の軍隊を東方の獨白國境に移して對獨態勢を執つた。以上のやうに英佛白蘭の四國が共同戰線を協定したとの諜報に接した獨逸は、今や一刻の猶豫も爲し難しと、斷然三軍の進擊を命令したのである。それで獨逸は五月九日、白蘭侵入の理由に關し次のやうな要旨の覺書を發表した。

「英佛側は白蘭の中立地を通過して獨領ルール工業地帶に侵入せんとしてゐるが、獨逸は斷じて之を默認することは出來ない。よつて機先を制し白蘭の中立を擁護せんが爲め進軍せんとするものである。

しかし獨逸は決して白蘭兩國民を敵とするものではない。又兩國の主權は云ふまでもなく、歐洲並に歐洲以外に於ける兩國の權益に對し、現在も亦將來も之を侵犯せんとするものでないことを茲に宣言す。

獨逸政府は白蘭兩國政府が獨逸軍に抵抗せぬやう要請する。若し抵抗する場合には獨逸軍は有らゆる手段を以て之を粉碎し去るであらう」。

猛虎の一聲、白蘭の天地を震駭した。されど彼等は英佛の後援を恃み斷乎として拒絕した。之は獨逸の百も豫期する所であつて、彼は豫定計畫に基づき和蘭へは五月十日午前二時四十分、白耳義へは同午前四時それ〴〵侵入し、ルクセンブルグ公國政府に對しても獨軍の作戰地域となる旨を通告して侵入したのである。

しかし獨軍の眞意は最初白蘭兩國を共の占領下に置き、此處に空軍及び潜水艦の根據地を設け之を以て對英攻撃の基地と爲さんとするのだと見られたが、ヒットラーは更に一歩を進め此の機に乘じ英佛軍に殲滅的打撃を與へ戰争の勝敗を一擧に決せんとしたやうである。

では獨逸は何故決戰に出でたのか?、惟ふに最近に至り聯合國側の對獨封鎖は益々强化され、荏苒時を延すことは獨逸にとつて不利である。固より獨逸にも長期戰に對處する用意はあらうが、それでも長期戰は獨逸にとつて不利なることは疑ひを容れぬ。殊に現在の所獨逸空軍は英佛側に比し壓倒的に優勢であり、陸軍も優りこそすれ劣らない。海軍だけは英佛の方が優勢なれど、ノルウェー戰争で獨逸空軍の爲めに相當な損傷を受けた筈だ。殊に目下地中海方面の情勢が險惡であるから英佛は艦隊の相當量を地中海に割かねばならぬ。又米國の英佛援助も日を經れば經る程英佛側の軍備を强めること丶なる。殊に今秋大統領の選擧でも濟めば米國は參戰することになるかも知れぬ。如かず、乾坤一擲の決戰を挑み今の内に英佛を叩き付けんには!。恐らく斯うした考へから獨逸は、ノルウェー作戰の失敗により英政局の動搖に乘じて決戰の擧に出でたものであらう。

第二節　兩軍の作戰

先づ兩軍の防禦陣地を概說する。

其一　兩軍の陣地

【其一　和蘭】　和蘭陸軍は本國の中立維持を本義とし他國の侵入を受くるに際しては持久的防禦作戰に依りて

第二節　兩軍の作戰

先づ兩軍の防禦陣地を概說する。

其一　兩軍の陣地

【其一　和蘭】　和蘭陸軍は本國の中立維持を本義とし他國の侵入を受くるに際しては持久的防禦作戰に依りて要點を確保し、其の間他國の援助を期待すると云ふのが其の大方針である。之が爲め大體陣地帶を三線に構成す。

第一陣地帶　之はイーゼル陣地とマース陣地との二つに分かれ、イーゼル陣地はイーゼル河に沿ひ、其の河ロハッテム附近から右翼アーネム（アルンヘム）に至り、マース陣地はマース河に沿ひ、左翼アーネム附近から右翼ロエルモンドに至る野戰築城程度の陣地である。

第二陣地帶　之もグレッペ陣地とペール陣地との二つに分かれ、グレッペ陣地は左翼ゾイデル海岸から右翼レーネンに至り、ペール陣地は左翼ミル附近から右翼は第一陣地の右端ロエルモンドに連結し築城の强度左程大ではない。

第三陣地帶　之は主抵抗線であつて左翼はアムステルダム附近より起り、ユトレヒトを經て右翼ブレダに迄延伸し、一名水濠陣地と稱し附近に氾濫地帶を設置し、而してヘーグ、ロッテルダム地方を掩護す。氾濫の水深は約五十サンチ位のものである。

其　他　南方に袋の如く突出せるブルグ地方には平時半永久築城あるも大なる期待を有せず、又北方グローニンゲン及び海岸の要地には大小の堡壘あるも舊式で特に有力なものではない。

【其二　白耳義】　白國の對獨陣地は大體二線に構築せられ、和蘭に比し堅固なものである。

第一陣地帶　之は左翼和蘭のペール陣地に連結しリエージュ要塞を經てグビー、ヌーフシヤトーを過ぎて佛

のマジノ本線のカリニヤンに連なる。

此のリエージュ要塞は前世界大戰の初期ルーデンドルフ大佐の突入攻略したことにより有名なもので、其の當時の要塞線はリエージュ市の東方約二里の地に設けられてあつたが、其の後約五里に離隔し半圓形に新築され、其の分派堡の一つであるエベン・エマエルは今次の戰に獨落下傘部隊及び其他の部隊により血戰を交へられた有名な裝甲大堡壘である。

第二陣地帶　之は左翼アントワープより起りルヴァン、ナムール要塞、デナントを經て佛のマジノ本線最左翼モントヘルメに連なる。ナムール要塞以北をディール陣地、以南をマース陣地と稱し、年來巨額の費用を投じ、堅固に構築し大なる期待を懸けてゐたのである。

此のマース陣地線は所謂マース河谷にして各所に於て深谷を成し、アルデンヌ山脈及び森林に掩はれて天然の障碍たる上尙ほ工事を施して一層之を强化したのであるが、今回獨軍主力の爲めに容易に突破された。此の附近を流るゝマース河の幅は約五十米内外である。

其　他　アントワープとマーストリヒト間にアルベルト運河陣地あり、河幅約百米、約四千噸級の船舶の航行に適す。尙ほ首都ブラッセル及びガン市等には相當な防禦設備が施されてあるが、眞面目に抵抗準備を爲したものとは認め難い。

【其三　佛蘭西】　佛蘭西の對獨作戰はマジノ線による攻勢防禦を本則としてゐる。マジノ線は一九一九年のヴ

エルサイユ媾和會議で佛將フォッシュ元帥のライン國境論が敗れた時、其の代償として英佛米の間に對獨軍事同盟が出來たが、それが米國のヴェルサイユ條約否決によつて流産した。そこで生れたのが此のマジノ線である。

の航行に適す。尚ほ首都ブラッセル及びガン市等には相當な防禦設備が施されてあるが、眞面目に抵抗準備を爲したものとは認め難い。

【其三　佛蘭西】　佛蘭西の對獨作戰はマジノ線による攻勢防禦を本則としてゐる。マジノ線は一九一九年のヴエルサイユ媾和會議で佛將フォッシュ元帥のライン國境論が敗れた時、其の代償として英佛米の間に對獨軍事同盟が出來たが、それが米國のヴェルサイユ條約否決によつて流產した。そこで生れたのが此のマジノ線である。

最初一九二二年ペタン元帥等は戰爭の經驗を基礎とせる新式の要塞をライン河とルクセンブルグ公國との中間アルサス、ローレン國境に設置すべきことを力說した。其の後要塞の要否、型式、强度等に就き色々論議の結果一九二七年頃から要塞の修築を開始し、當時の陸相マジノは一九三〇年から本格的に構築を促進し同三十四年に大體の完成を告げた。それで其の構築に多大の盡力を致せる陸相マジノの名を冠して本要塞をマジノ線と稱したのである。マジノは元來武人でなく行政官出身の代議士であつたが、前大戰に出征した戰傷勇士であるが、要塞の完成を見ず一九三二年に歿した。其の費用は百六十億フランと云はれてゐる。次いで一九三七年以後更に戰車を目標に全面的に强化を施し五箇年計畫で百四十億を計上された。故にマジノ線は佛國の血液であり心臟部であり重要なる財產でもある。

マジノ線を南から云へば、佛瑞國境より蜿蜒として北方ドーヴァー海岸のダンケルク迄約八百吉米連亙してゐる。而して之を本格式マジノ線（約四百六十吉米）と延長式マジノ線（約三百五十吉米）との二つに分けられ、本格式の方は瑞西國境からモンメデー附近まで、延長式の方は其の以北海岸迄である。本格式マジノ線はそれこそ特別大要塞を含む堅固なもので、大體に於て二線地帶に分かれてゐる。其の第一線は前述の國境に接するもので、第二線は昔から有名なベルフォール、エピナール、ツール、メッツ、ヴェルダン等の金城鐵壁から出來てゐ

る。

本格式マジノ線は二吉米毎に堅固なるトーチカを作りて陣地の支撐點となし地上、地下に至るまで殆んど出來るだけの人工と近代科學を最高度に應用した要塞線であつて、如何なる方面から見ても難攻不落を保證されたものである。此の附近のライン河は河幅三百乃至五百米、流速急にして三乃至五米である。

延長式マジノ線はモンメデーからダンケルク間の陣地であり、以前は築城を實施しなかつたが白耳義の政情變化を慮り一九三六年より急遽築城を實施することに決したが、其の正面約三百五十吉米もあり、之を全部本格式マジノ線と同一強度に構築することは不可能なるを以て、軍事的に觀察して必要なる部面にのみ簡單な工事を施し、且つ氾濫を利用する設備を施した程度であつた。故に此の延長式マジノ線は本格式マジノ線と同一に見る能はざる薄弱な陣地線であつた。故に今回の戰爭に於ても獨軍の爲め容易に突破蹂躪せられた。

五月十九日獨軍の爲め突破されたマジノ線は本格式と延長式との接際部に位する五〇五號トーチカ堡壘であつた。之はモンメデー堡西北方約三里、ヴィリー村の東南臺上に在りて本格式マジノ線の最左翼支撐點であつたのだ。ヴィリー村附近の陣地は三線に編成せられ、五〇五號トーチカは第二線陣地に屬し最新式のもので守備兵約二百名、十サンチ半級までの各種火砲及び多數の機關銃を備へ地窖完全なものであつたが、遂に突破されて了つた。戰術書に陣地の接際部は敗れ易いから注意せよと云ふことがある。之は物理學上から見ても當然なことだ。獨軍は善く斯う云ふ點にまで注意したものである。鑑むべきことだ。詳細は後述する。

二百名、十サンチ半級までの各種火砲及び多數の機關銃を備へ地窖完全なものであつたが、遂に突破されて了つた。戰術書に陣地の接際部は敗れ易いから注意せよと云ふことがある。之は物理學上から見ても當然なことだ。獨軍は善く斯う云ふ點にまで注意したものである。鑑むべきことだ。詳細は後述する。

【其四　獨逸】　ヒットラーは一九三三年政權を掌握するや國際聯盟を脫退し、一九三五年にはヴェルサイユ條約廢棄の爆彈宣言を發表して常備軍を五十萬とする案を聲明した。此の時佛國は獨逸に對し强硬手段に出づる元氣もなく當時既に築造中であつたマジノ線の竣功を急いだ。

一九三六年獨逸はロカルノ條約を廢棄し旗鼓堂々と兵をラインランドに出して玆に進駐させた。之は非常な冒險でもあり、佛國に對する挑戰と見られぬこともないので軍部は萬一を慮つてヒットラー總統に其の無謀を諫めたが、ヒットラーは斷乎として之を肯かなかつた。佛國側ではガムラン將軍の如きは此の機會に獨逸を打倒すべしと獻策したが、人民戰線の政府には其の勇氣もなく遂に泣寢入りになつて了つた。此の年ヒットラーは遠く慮る所ありて西方防壁所謂ジーグフリード線の築造に着手し、全國の勞働力其他一切を總動員して功を急ぎ、一九三八年に完成したのである。

ジーグフリード線は獨逸の國民的敍事詩「ニーベルゲンの歌」に出て來る怪物退治の英雄ジーグフリードに由來するものである。一九一六年、前大戰に於て始めて鐵カブトが採用され、戰車が登場して獨軍が敗れたソンムの戰の後、獨逸は曩に東部戰場で殊勳を樹てたヒンデンブルグ元帥を西部に移して陣地の建て直しに著手した。それで彼は地形を視て「これ以上一歩も退かず」と云ふ地點に蜿蜒たる要塞線を構築した。之がヒンデンブルグ線又はジーグフリード線と呼ばれた。ヒットラーの對佛防禦線は右の名前を繼承したのであるが、特に命名された譯ではなく、云はゞ通稱なのである。

ジーグフリード線は南より云へば獨瑞國境よりライン河右岸に沿ひカルルスルーへ西方より同河を西に横ぎりザールブリュッケンを經てルクセンブルグ公國の東邊を北上しアーヘン、ゲルデルンを過ぎてライン河の東方獨蘭國境附近に至る蜿蜒約八百吉米に亙り其の堅固なる事マジノ線より優位にありと云はれた。尙ほカルルスルーへよりライン河右岸に沿ひ北に走る第二陣地線をも設けてある。裝甲トーチカの數約一萬二千以上と云はれた。

尙ほヒットラーは特に自動車道の建設並に西部防空地帶をジーグフリード線と合體して構築し一層其の强度を増加した。而して西部國防軍司令官フォン・ヴィッツレーベン大將は「西部城壁は儼たり、來たらんとするものは來たれ」と豪語した。

其二　作戰計畫

英佛聯合軍が北佛の地に集結し機を見て白蘭兩國に進出し、是れ等兩國軍と相携へて獨逸ルール地方に侵襲せんとする企圖のあることが獨逸によつて諜知される所となつた。此の事を理解して置いて次の獨逸作戰計畫を見るべきである。

【獨軍の作戰計畫】　其の一般方略及び各軍の任務概ね次の如くである。

一、速かに蘭國を占領し、英軍の蘭國を占領利用するを未然に防止す。

二、白國及びルクセンブルグ公國を通過して西方に進撃し、英佛軍を殲滅するの端緒を開く。

最初は大體以上のやうな大方針であつた。之が爲め一部をリエージュ以北の蘭國方面に指向し蘭軍を撃破して白國に進入し以てルール地方に侵襲せんとする敵の企圖を阻止すると共に、成るべく多くの敵を其の方面に牽制し、而して主力をばリエージュ以南の地區に指向しディナン、セダン間にて敵を突破し、ソンム河に向ひ突進し

一、速かに蘭國を占領し、英軍の蘭國を占領利用するを未然に防止す。
二、白國及びルクセンブルグ公國を通過して西方に進撃し、英佛軍を殲滅するの端緒を開く。
最初は大體以上のやうな大方針であつた。之が爲め一部をリエージュ以北の蘭國方面に指向し蘭軍を撃破して

白國に進入し以てルール地方に侵襲せんとする敵の企圖を阻止すると共に、成るべく多くの敵を其の方面に牽制し、而して主力をばリエージュ以南の地區に指向しディナン、セダン間にて敵を突破し、ソンム河に向ひ突進しようと云ふのである。其の作戰部署の大要は、

獨軍總司令官　フオン・ブラウヒッチ上級大將
總參謀長　ハルダー大將

一、B軍集團（第十八、第六軍……）
司令官　フオン・ボック上級大將
B軍は速かに蘭國に侵入して同國を占領し、次いでアントワープ、ナムール間の連絡を遮斷し、リエージュ、ナムール要塞を孤立せしめて之を攻略す。
第十八軍司令官　フオン・キュヒラー大將
步兵六師團、機械化一師團、裝甲（戰車）一師團、騎兵一師團……
第六軍司令官　フオン・ライヘナウ上級大將
步兵十八師團、機械化一師團、裝甲二師團……

二、A軍集團（第四、第十二、第十六軍……）
司令官　フオン・ルンドステット上級大將

A軍はメッツ、ヴェルダン方面に對し左側を警戒しつゝ、ディナン、セダン間にてマース河を渡河し速かにソンム河口に向ひ前進す。此の際快速兵團を以て深く敵線内に突入して右の渡河點を突破せしむ。

第四軍司令官　フォン・クルーゲ上級大將
歩兵十二師團、裝甲二師團……
第十二軍司令官　リスト上級大將
歩兵十師團……
第十六軍司令官　ブッシュ大將
歩兵十三師團……
クライスト兵團司令官　フォン・クライスト大將
機械化四師團、裝甲(戰車)五師團

三、C軍集團(第一、第七軍)
司令官　フォン・レープ上級大將
C軍はザールルイ以南に在り欺騙行動に依り敵を正面に牽制す。之が爲めプァルツ森林西方に重點を指向して陽攻を實施す。

第一軍司令官　フォン・ヴィッツレーベン上級大將
歩兵十三師團……

司令官　フォン・レープ上級大将

C軍はザールルイ以南に在り欺騙行動に依り敵を正面に牽制す。之が爲めプァルツ森林西方に重點を指向して陽攻を實施す。

第一軍司令官　フォン・ヴィッツレーベン上級大将

歩兵十三師團……

第七軍司令官　ドルマン大将

歩兵四師團……

四、總豫備十一師團……

五、空　軍

總司令　ゲーリング元帥

軍團長　ケッセルリング空軍大将

軍團長　シュベルレ空軍大将

飛行師團二十二

空中歩兵師團二（落下傘聯隊、空中歩兵聯隊を主幹とす）

以上兵力總計

約二百萬（約百三師團）

飛行機　約一萬二千機

前述獨軍の作戰計畫の立案に方りて幾多の議論があつた。即ち其の一はシュリフェン案に依り右翼を强大なら

しめて海岸方面から遠廻しに佛國を包圍する案で、之は前世界大戰に獨軍の採つた案である。他の一つは今回の如く中央を突破する案の二つであるが、それが非常な大問題となつた。

包翼論者の一派は、今回は和蘭をも手に入れ得るから前大戰の時よりも包圍翼を延ばして大規模の包圍を實施することが出來る。殊に從來なかつた裝甲師團或は機械化師團の如き快速部隊を有してゐるから、包翼運動を容易にし且つ一層其の威力を發揮し得べしと云ふのである。

之に對し中央突破論者は、北方に翼を延ばせば延ばす程英佛軍の主力と衝突して逐次抵抗を受け戰爭長期に亙るの懼れあり、故に速戰速決の方針に從ひ中央突破に依つて敵を分斷し各個に擊破殲滅するを可とす。而して其の突破點をモンメディ、セダン附近とすると云ふのである。

然るに反對者は又曰く、モンメディ、セダン附近に進出するには有名な障碍地であるアルデンヌの大森林地帶及び嶮岨なる河岸を渡過せざるべからず。軍隊の運動就中近代兵器たる機甲部隊が一たび此の障碍に遭ひ立往生を爲すが如きことあらんか、急襲突破は得て望み難く作戰は根柢より崩潰すべし。尙ほ中立國たるルクセンブルグは小國なれども橫斷距離約五十吉米あり、之が突破間、英佛軍に戰鬪準備を爲すの餘裕を與ふべく且つ敵から側面を衝かれるの惧れがあつて危險であると云ふ論である。

然れども最高統帥はモンメディ、セダン附近は本格式マジノ線の翼端であるから相當に堅固ならんも、マジノ延長線との接際部に近きを以て突破必ずしも不可能にあらず、若し之を突破せば爾後の運動は非常に容易なるべし。地形の困難の如きは統帥及び運用の妙を發揮することにより之を克服し得べしと竟にモンメディ、セダン突破案を採用した。此の時ヒットラー總統は一部の反對を斥け斷乎として中央突破案を支持し自己の意志を飜さず

し。地形の困難の如きは統帥及び運用の妙を發揮することにより之を克服し得べしと竟にモンメディ、セダン突破案を採用した。此の時ヒットラー總統は一部の反對を斥け斷乎として中央突破案を支持し自己の意志を飜さず敢行した。此の案は一般常識を離れたる放膽なものであるが、此の常識以外の戰法なればこそ其處に急襲の成功を見ることが出來るのである。總參謀長ハルダー大將も熱心な此の案の支持者であり、素人將軍ヒットラーは固より其の主張者であつて、彼等は「吾人は波蘭戰爭に於て空軍と快速部隊の威力に依つて偉大なる戰果を擧げた。吾等は技術的にも精神的にも英佛軍に優れり、故に敵の豫想せざるアルデンヌの大障碍を突破して裝甲快速部隊を進め奇功を收めざるべからず。後世の史家は或は之を以て無謀と云ふかも知れぬ」と云ふやうなことを言つてゐる。我がマライ戰に於ける山下將軍の放膽作戰と較べて名將の相通ずるものあるを思はしめる。鵯越えの戰、桶挾間の戰皆此の類である。

【聯合軍の作戰計畫】 其の一般方略及び各軍の任務概ね次の如くである。

一、南方諸軍はアルサス、ローレン方面の本格式マジノ線に據りて嚴重に防守し獨軍の攻勢を反擊す。

二、北方諸軍はメジエール（セダンの西）を旋回軸として白國の堅固なるアントワープ、ナムール、マース河の防禦線に進出して獨軍の進擊に對抗す。

此の作戰方針に就いては更に後述するが、之には不得要領の點があつて攻勢防禦でもなく、持久防禦でもなく、中途半端のやうである。其の作戰部署の大要は、

（イ）佛軍總司令官　ガムラン大將

一、第一軍集團（第七、英、第一、第九、第二軍）

司令官　ビヨット大將

左はゼーランド、アントワープよりルーヴァン、ナムール要塞を經て右はマース河の線を守備し更にロングウィに至る旋回軸を確保す。

第七軍司令官　ジラール中將

步兵四師團、機械化三師團……

英軍司令官　ゴート大將

步兵七師團、騎兵一師團……

第一軍司令官　ブランシヤール大將

步兵四師團、機械化三師團、要塞兵一師團……

第九軍司令官　コラップ大將

步兵五師團、騎兵二師團、スパイ一師團……

第二軍司令官　アンヂジェール大將

步兵五師團、騎兵二師團半……

二、第二軍集團（第三、第四、第五軍）

司令官　プレトラ大將

歩兵五師團、騎兵二師團、スパイ一師團……

第二軍司令官　アンヂジェール大將

歩兵五師團、騎兵二師團半……

二、第二軍集團（第三、第四、第五軍）

司令官　プレトラ大將

左はロングウィ附近より右はストラスブルグ附近に至るマジノ線を據守す。

第三軍司令官　コンデ大將

歩兵八師團、騎兵部隊……

第四軍司令官　レキアン大將

歩兵五師團……

第五軍司令官　ブーレ大將

歩兵七師團、要塞兵七師團……

三、第三軍集團（第八、〇團、第十軍）

司令官　ベッソン大將

左はストラスブルグ附近より右は伊國境に至る間を守備警戒す。

第八軍司令官　ガルシュリー大將

歩兵七師團、スパイ半師團、要塞兵三師團……

第〇兵團

歩兵三師團……

第十軍司令官　アルマイエー大將

歩兵十師團……

四、總豫備（二十五師團）

歩兵十二師團、機械化四師團、裝甲三師團……

第六軍（司令官ツーション大將の歩兵六師團）

以上計　約百二十師團、二百萬（白蘭方面約八十萬）

飛行機　約四千機

（ロ）英軍　司令官　ゴート大將

約三十萬（十二師團基幹）

飛行機　約千五百機

（ハ）白耳義軍　司令官　國王レオポルド三世

約七十萬（二十二師團基幹）

飛行機　約二百機

（ニ）和蘭軍　司令官　ウインケルマン

約五十萬（十一師團基幹）

飛行機　約三百機

約七十萬（二十二師團基幹）

飛行機　約二百機

（三）和蘭軍　司令官　ウインケルマン

約五十萬（十一師團基幹）

飛行機　約三百機

以上聯合側總計（白、蘭、北佛方面の分のみ）

約二百三十萬（約百九師團）

飛行機　約六千機

佛軍の作戰に就き聊か述べて見る。國家の興亡に關する作戰計畫に不徹底な點のあるほど禍なるはない。それが佛軍にあつたのである。元來此の大戰の起る前に佛國の大立物の中に攻勢を避けて守勢を主張した者が二人あつた。それは首相のダラディエとガムラン將軍とである。

將軍は第一次世界大戰に佛軍の頽勢を盛り返して巴里の急を救つたジョッフル元帥の帷幕にあつた名參謀で獨軍を反擊する機會を摑んだ獻策者である。當時獨逸は百七十萬の大軍を動かして一擧に佛國を押し潰さうと、有名な蝶番陣と云ふ包圍隊形を採り二十日間に百八十哩の速度を以て白佛の野を席卷した。獨の最右翼第一軍を率ゐたクック將軍の失敗がなかつたならば、あの時巴里は陷落したかも知れなかつた。然るに同將軍は巴里の西南に進出して包圍の態勢を執る筈であつたが、方角を失して巴里の東の方向へ針路を向けた。其の爲めに獨軍の右翼が露出された。獨軍の此の虛を發見したものは巴里要塞司令官ガリアニ將軍と當時四十二歲でジョッフル元帥の幕僚であるガムランの二人であつた。

二人はジョッフル元帥に獻策し獨軍の虚を衝くべしと主張したが元帥は躊躇して決せず、危く機會を逸する所であつたが、遂には反撃を決意して大擧獨軍の虚を衝き、彼に總退却を餘儀なくせしめて、マルヌの大勝を獲たのであつた。

ガムランは一八七二年代々軍人の家に生れ、父系から五人の大將を出してゐる。父はナポレオン三世の時墺太利との戰でソフェリノ役で負傷し後に陸軍總監に補せられた。その子と生れた彼は士官學校、陸軍大學を首席優等で卒業し、大學では後に元帥となつたフォッシュ中佐の下に戰術を研究し其の才幹を認められた。其の後軍團長、ジョッフル將軍の副官、軍事參議官、參謀總長、軍事參議院次長なる陸軍最高の地位を占め、有名なマジノ線を海岸まで延長したのは彼であり又一年乃至一年半の在營期を二年に延長したのも彼である。矮軀にして簡易な生活を營み、五十五歳になつて始めて結婚した。今や六十六歳の高齡を以て佛國の休戚を一身に負ふだけでなく國際的責任を帶びる地位に立つたのである。彼のモットーとする言葉は「樂觀は贅澤なり」と云ふのである。

ガムランは性格的に防禦戰に强い佛國軍人の代表的人物であつて、マジノ線に全幅の信賴を置き兵力の不足を英軍三十萬によつて補ひ、瑞西からドーヴァー海峽まで蜿蜒八百キロに亙る金城鐵壁に據つて守勢を執る決心であつた。白耳義への進出は恐らく彼の本意ではなかつたらしい。況んや戰爭に無經驗で弱い和蘭などを卷添へにする氣は初めからなかつたやうだ。强豪獨逸がよし攻勢に出て來ても難攻不落のマジノ線あるからには獨軍に一泡吹かすことが出來ると云ふのが、數學者たるガムラン將軍の計算であつた。

此の氣分が自然に親友ダラディユ首相の行動にも影響して彼を引込み思案に陷らしめたのは已むを得ない。ガムランの守勢作戰は佛國を思へばこそである。彼は誰よりも善く佛國軍備の不充分なことを知つてゐる。されど

あつた。白耳義への進出は恐らく彼の本意ではなかつたらしい。況んや戰爭に無經驗で弱い和蘭などを卷添へにする氣は初めからなかつたやうだ。强豪獨逸がよし攻勢に出て來ても難攻不落のマジノ線あるからには獨軍に一泡吹かすことが出來ると云ふのが、數學者たるガムラン將軍の計算であつた。

此の氣分が自然に親友ダラディユ首相の行動にも影響して彼を引込み思案に陷らしめたのは已むを得ない。ガムランの守勢作戰は佛國を思へばこそである。彼は誰よりも善く佛國軍備の不充分なことを知つてゐる。されど公然と之を發表する譯には行かぬ。彼は決して臆病な守勢論者ではない。ヒットラーがヴェルサイユ條約を破棄し軍備擴張を聲明した時、獨逸を擊つのは今であると叫んだのはガムラン將軍であつた。故に端的に彼を佛國を亡ぼした守勢將軍と貶する譯には行かぬ。

今次の大戰を始めた者は軍人でなく英佛の政治家である。唯彼等は政治的に經濟的に思想的にヒットラー憎さに、獨逸の勃興嫉しさに之を打倒せんとしたのである。而して彼等は前大戰の光景を今尙ほ信じてゐる。獨逸は如何に强くとも長期戰となつたならば時の經つと共に材料の缺乏に惱んで來る筈だ、ニッケル、錫、銅、石油、ゴム等が無くなるだらう。聯合側が一九四一、二年頃まで頑張れば戰車も飛行機も獨軍を凌ぐことが出來る。故にそれ迄マジノ線に據つて守勢を執り、一方には世界の各方面に對獨戰を擴大して獨逸を奔命に疲れしめ、然る後適當の時機に攻勢に出でて彼に止めを刺さうと云ふ考へであつた。

以上の考案はダラディユ首相、ガムラン將軍の方針に合するものである。されど斯くの如き消極的作戰は大衆の人氣に投ずるものではない。佛國民はヒットラー出現以來恐獨病に襲はれ、三回も臨機の動員令に接し一般に不平不滿の氣に掩はれ、獨逸と戰ふなら眞劍にやらうと云ふ氣分も勃興して來た。さればとてガムランはマジノ線を越えて攻擊前進し更に敵のジーグフリードの長城を突破して獨逸國內へ侵入するだけの見込みはない。それ

よりは他方面に戰線を擴大して獨逸の勢力を殺ぐと云ふ方策を採つた方が善いと云ふことになつたのである。此の方針は確かに妙策であつて、其の後英國がバルカン、シリヤ、イラン、イラク等に戰火を擴げ、最近第二戰線の構成に躍起となつてゐるのは即ち此の種方策の一つである。

ガムランの案は近東方面に戰線の擴大を圖ると云ふのである。近東就中シリヤにはウェーガン將軍の指揮する二十萬の軍がある。よつて英佛土相互援助條約を發動させてバルカン方面に行動を起して獨逸への石油、穀物輸出を防遏したならば少くも百萬の獨逸兵を東南歐へ牽制する效能があると云ふのであつた。然るに此の遠攻策は蘇聯抱き込みを夢みてゐる英國の贊成を得る譯に行かなかつた。

次に考へられたのは芬蘭援助、ノルウェー、瑞典通過問題である。此の事に就いては、前章に述べた所であるが、つまり芬蘭援助に名を藉りて十萬の兵を瑞典、ノルウェー國內に進駐し一は以て獨逸の側背を脅す戰略上の利を收め、一は以て瑞典鐵鑛の獨逸輸出を禁遏して經濟上の利を得んと目論だのである。然るに之も亦失敗に終つた。

そこで今度樹てられた計畫は白蘭兩國を通じてルール地方侵入を目的とする攻擊案である。之はガムラン將軍並にダラディユ首相の本意ではなかつたらう。が、彼等は政治家からは無爲無能だと攻擊され、少壯軍人からは優柔不斷だと罵倒され、殊に反對政黨はダラディユ內閣打倒を叫ぶと云ふ有樣であつたから、ガムランは心ならずも此のルール侵入策を樹てたものであつたらう。

此の政爭はとう〳〵激化してレイノーは代つて首相となつたが、ダラディユを閣外に追ふことは危險だと云ふので已むを得ず國防相兼陸相として閣內に留め、ガムランも解職される所であつたが、親友のダラディユ陸相が

並にダラディユ首相の本意ではなかつたらう。が、彼等は政治家からは無爲無能だと攻撃され、少壯軍人からは優柔不斷だと罵倒され、殊に反對政黨はダラディユ内閣打倒を叫ぶと云ふ有樣であつたから、ガムランは心ならずも此のルール侵入策を樹てたものであつたらう。

此の政爭はとう〳〵激化してレイノーは代つて首相となつたが、ダラディユを閣外に追ふことは危險だと云ふので已むを得ず國防相兼陸相として閣内に留め、ガムランも解職される所であつたが、親友のダラディユ陸相が職を賭して爭つたので、漸く留まることが出來た。そして間もなく西方戰線の大戰が始まつたのである。

以上のやうな事情からして政界は互に軋轢排擠を事として醜態を暴露し、それが軍の統帥にも影響したのは當然である。ガムランも心中餘程不快であつたと見えて、一應はルール侵入の爲めの英佛白蘭四國軍の共同作戰を計畫したもの丶、自分は戰線を巡視して志氣を鼓舞するでもなく、巴里郊外のシヤトー・デ・ヴンセンヌの古要塞に納まつて聯合軍を指揮した。

政略が軍事に干渉することはヒットラーの如く大政治家が同時に不世出の大軍人である場合に於てのみ允されることで、他の場合に於ては大抵好結果を得ないものである。ガムランの心情には同情すべき點もあるが、此の際一切私心を滅却して聯合軍の爲めもつと眞劍であるべきであつた。人間は矢張り一種の感情生物であるのか？彼の作戰指導は頗る緩慢で獨軍が白蘭國境突破の報を聞いて彼は始めて諸軍に前進を命じたやうな始末であつた。開戰の劈頭に於て此の不快な空氣に掩はれた軍隊の行動は又從つて不徹底、不秩序なものとなり、戰はずして既に敗色を呈し遂に大敗の素因を作つて了つた。

附圖第十九

ゾイデル海
グローニンゲン
ハーリンゲン
アムステルダム
ヘーグ
ロッテルダム
ユトレヒト
ドルトレヒト
水濠陣地
グレッペ陣地
イーゼル陣地
ハッテム
アーネム
レーネン
蘭
18軍
B軍集團
(ボック軍)
獨軍
獨
(ルール地方)
マース河
ブレダ
ゲルデルン
マース陣地
ペール陣地
アントワープ
アルベルト陣地
ライン河
ケルン
アーヘン
ジーグフリード線
(ブルグ)
ロエルモンド
マーストリヒト
ハッセルト
エバンエマエル
ディール陣地
ディール河
ルヴァン
チルルモン
リエージュ
ヌーシャトー
バチス
ナムール
マース河
サンブル
アルデンヌ森林
グビー
ルクセンブルグ
A軍集團
(ルンドステット軍)
クライスト兵團
12
6
4
16
1
モーゼル河
デナン
ジヴェー
マース陣地
モンテルメ
メジエール
ロクロア
セダン
カリニャン
ヌーフシャトー
ロングウィ
線
(505)
モンメディ
チオンヴィユ
ザール河
ザールブリッケン
メッツ
2
3
大
マ
C軍集團
カルル
レテール
ストンヌ

獨軍
獨
(ルール地方)
ライン河
ケルン
アーヘン
ゲルデルン
ジーグフリード線
A軍集團
(ルンドステット軍)
クライスト兵團
C軍集團
モーゼル河
ザール河
ザールブリッケン
カルルスルーへ
ザースバハ
大マジノ線
メッツ
チオンヴィユ
ストラスブルグ
コルマール
ブリサシュ
ミールーズ
ベルフォール
エピナール
ツール
ヴェルダン
マース河
セダン
モンメディ
ロングウィ
ルクセンブルグ
アルデンヌ森林
ナムール
リエージュ
マース陣地
ペール陣地
アルベルト陣地
ディール陣地
ディール河
アントワープ
ブレダ
マーストリヒト
ロエルモンド
ハッセルト
チルルモン
ストンヌ
レテール
第二軍集團
第三軍集團
1
2
3
4
5
6
7
8
10
12
16

兩軍陣地並集中要圖

ゾイデル海
蘭
グローニンゲン
ハーリンゲン
アムステルダム
ヘーグ
ロッテルダム
水濠陣地
グレッペ陣地
ユトレヒト
イーゼル陣地
ハッテム
アーネム
ドルドレヒト
レーネン
マース河
ゼーランド
ムルデック
ブレダ
セルトゲンボスク
アインドホーヘン
ミル
マース陣地
ペール陣地
ゲルデルン
シゲンシーリフ
アントワープ
シェルデ河
アルベルト陣地
ロエルモンド
マーストリヒト
(ブルグ)
ジーグフリード
ライン河
ケルン
アーヘン
ゼーブルッゲ
オスタンド
ガン
ダンドル河
リス河
ブラッセル
ルヴァン
ディール陣地
ディール河
ハッセルト
エベンエマエル
ダンケルク
ニューポール
イープル
白
チルルモン
リエージュ
ヌーシャトー
ナムール
カレー
7軍
ブローニュ
サンポール
リール
小英
マジノ線
大マ
18
6
4
12
1
9
2
3
アルデンヌ森林
デナン
ジヴェー
モンテルメ
サンブル河
ヴァランシエンヌ
モーブージュ
アラス
カンブレー
サンカンタン
バポーム
アミヤン
ソンム河
サンバレリー
アブヴィル
イルソン
ロクロア
メジエール
セダン
アルデンヌ運河
ラオン
エーヌ河
レテール
ストンヌ
オアズ河
コンピエーニュ
ソアッソン
カリニャン
モンメディ
ロングウィ
ルクセンブルグ
ヌーフシャトー
チオンヴィユ
メッツ
ザール河
ザールブリッケン
モーゼル河
(505)

要圖
ジーグフリード
マジノ線
小マジノ線
大マジノ線
白
佛
巴里
第一軍集團
(ビヨット軍)
第二軍集團
第三軍集團
7軍
英
アントワープ
ゼーブルッゲ
オスタンド
ニューポール
ダンケルク
カレー
ブローニュ
サンポール
イープル
リール
ガン
ブラッセル
ルヴァン
ナムール
リエージュ
ヌーシャトー
バチス
マーストリヒト
ロエルモンド
アーヘン
ケルン
ゲルデルン
ヘッセルト
チルルモン
アルベルト陣地
ディール陣地
マース陣地
ペール陣地
ブレダ
ミル
セルトーゲンボスク
アインドホーヘン
エマエンベエ
アルデンヌ森林
ルクセンブルグ
ヴァランシェンヌ
モーブッジュ
イルソン
ロクロア
メジエール
セダン
モンメディ
ロングヰー
カリニヤン
ヌーフシャトー
ジヴェー
デナン
モンテルメ
ヴェルダン
メッツ
チオンヴィユ
サンアヴォル
サラルブ
ザールブリッケン
ツール
エピナール
ベルフォール
アラス
カンブレー
サンカンタン
バポーム
アミヤン
アブヴィル
サンバレリー
ラオン
レテール
ストンヌ
ソアッソン
コンピエーヌ
シャトーチヱリー
シャトーデヴンセンヌ
ライン河
モーゼル河
マース河
ソンム河
エーヌ河
オアーズ河
セーヌ河
マルヌ河
サンブル河
スヘルデ河
リス河
ザール河
シゲンシーリフ
(505)
0 10 20里
1 2 3 4 6 7 9 10 12

第三節　フランドルの戰（五月十日―六月四日）

一九三九年十月、波蘭戰爭終つてから西部國境に配置された獨軍約二百萬は以來、約七箇月に亙り寒氣の中に訓練を重ねてゐたが、敵が白蘭方面からルール地方に進擊せんと企て居るとの諜報に接したのでヒットラーは其の機先を制せんと五月十日早朝和蘭東境からモーゼル河畔に達する約四百五十吉米の正面に亙り決河の勢ひを以て突如白蘭國境を侵して前進を開始した。此の戰端開始に方りヒットラー總統の作戰軍に與へた激勵の辭の要旨は

「西方戰線の將兵諸君。

獨逸國民の將來を決すべき決定的鬪爭の秋は來たれり、過去三百年來英佛は歐洲の眞の安定を阻止し、特に獨逸を弱體無力化せんと努めた。此の目的の爲め佛國のみにても過去二百年の間獨逸に對し三十一回に及ぶ宣戰を布告した。

英國は又過去數十年に亙り萬策を弄して飽くまで獨逸の統一を妨げ、且つ八千萬同胞獨逸人の生活必需品の輸入を妨害した。

英佛の獨逸に臨むや、彼等に反する獨逸政體の如何を問ふにあらずして常に獨逸民族を打倒せんとした。斯くなりては獨逸は解體せられ獨逸民族は此の地球上に於ける生存權を喪失するに至るであらう。斯かる根據よりして彼等は予の提言せる平和の企圖を拒絕し昨年九月三日宣戰を布告するに至つた。

獨逸國民は英佛兩國民に對し何等の憎惡も敵意も抱くものではない。されど獨逸國民は今や存亡の問題に直面するに至つた。

我が勇敢なる軍隊は數週間にして英佛の手先である波蘭軍を降服せしめ以て東部よりの脅威を排除した。玆に於てか英佛は獨逸を北方ノルウェーより攻擊せんとしたが、獨逸國防軍は去る四月九日以來遂に右企圖を未然に防止した。

今又彼等は東南歐洲に於ては大規模な誘致作戰を行ひつゝ白蘭兩國を通過して我がルール地方への進擊を企圖しあり、

西方戰線の將兵諸君。

斯くて今や諸君に俟つべき秋は來たれり、今日開始せる戰鬪は獨逸國民の今後千年に及ぶ運命を決するものである。

今や諸君の義務を盡せ。

獨逸國民は其の祝福を祈りつゝ諸君と共に在り」。

二百萬將兵之を聽き意氣衝天の概を以て進發した。此の進發と共に數千百の飛行機は轟々天地を震はせて先づ白蘭の各都市を空襲した。各都市には何れも百機以上飛來したと云はれた。ヘーグ、ロッテルダム、アムステルダムは固より、空軍根據地、軍事施設は總て皆其の爆擊を被り、開戰第一日に於て既に蘭國上空の制空權は獨軍の手に歸した。而して上空より「獨軍は既に其の市を包圍せるに依り抵抗は無益なり、獨逸の敵は英國なるも戰爭の必要上已むなく蘭國に進入せり、市民の生命財産は之を尊重するも若し抵抗せば死刑に處する」旨のビラを

二百萬將兵之を聽き意氣衝天の概を以て進發した。此の進發と共に數千百の飛行機は轟々天地を震はせて先づ白蘭の各都市を空襲した。各都市には何れも百機以上飛來したと云はれた。ヘーグ、ロッテルダム、アムステルダムは固より、空軍根據地、軍事施設は總て皆其の爆擊を被り、開戰第一日に於て既に蘭國上空の制空權は獨軍の手に歸した。而して上空より「獨軍は既に其の市を包圍せるに依り抵抗は無益なり、獨逸の敵は英國なるも戰爭の必要上已むなく蘭國に進入せり、市民の生命財產は之を尊重するも若し抵抗せば死刑に處する」旨のビラを撒布した。突然の此の大空襲に市民は極度に悲痛絕望の淵に沈んだ。

其一　和蘭方面

五月十日早朝和蘭へ侵襲した獨軍の精銳は第十八軍と第六軍であつた。此の兩軍司令官は共に波蘭戰爭に參加して殊勳を奏し殊に第六軍司令官ライヘナウ大將は獨南方軍を率ゐシレジヤ方面から攻め込み、八日間突進疾驅を續けて戰車隊を首都ワルシヤワに突入せしめ、ラドムの激戰には敵兵六萬を包圍擊滅し、更に反轉してクトノの戰に於て十六萬の敵を包圍網の中に捕へた勇將で獨軍切つての電擊戰術と包圍殲滅戰の大家である。大將は一八八四年の生れ、父は砲兵大將、彼亦砲兵出身で前大戰中は參謀部に勤務し一九三六年砲兵大將、今次大戰勃發後上級大將となり今年取つて五十七歲の猛將である。第十八軍は主として北和蘭の中心へ、第六軍は南和蘭から白耳義へ向ひ突進した。

之に對し和蘭五十萬（實際戰線に就いた者は三十萬位であつたらう）は急ぎ既設陣地である第一線のイーゼル陣地、第二線のグレッペ陣地並にペール陣地、第三線の本陣地に據り相當勇敢に抵抗したが、獨軍の前に立つては、全くライオンと仔猫以上の優劣があつた。獨軍が强力優勢な戰車隊を先頭に立てゝ堅壘を踏み躪りつゝ猛進する、其の直後にモーター車步兵が緊密なる協力により、機械の運轉するが如く强行突進して行くのには和蘭軍

は手向ひが出來ず寧ろ呆然たる有様であつた。

それで獨軍は戰爭第一日（五月十日）の中にはグローニンゲン州を始め、イーゼル河東方地區を席卷してゾイデル湖岸に達した。翌十一日には第一陣地であるイーゼル線及びペール陣地を破りライン河とゾイデル湖の間にあるグレッペ陣地に向つた。此の陣地では頑强な抵抗が豫期されたが、此の陣地の後方に於て空前の一大珍事が突發した。それは獨逸落下傘部隊の活躍である。

【獨逸落下傘部隊】　獨逸落下傘部隊は伯爵スポネック將軍の率ゐる空中輸送部隊と共に上空高く飛んで和蘭國防の核心を成す要塞地帶内に降下して重要地點を占據し、其の一隊はロッテルダム市の一部に侵入し、ドルドレストの要點を取り其處より白耳義に通ずるマース河の大鐵橋メルデックを占領して之を確保した。之より是れ等の諸隊は鋒を揮ふて陣地に據る敵の背後を襲ふたのである。敵は前面から、背後から、且つ天空からの三面攻撃に遭ひ、全く手も足も出ず、爲めにさしも堅固なるグレッペ陣地も十三日を以て突破されて了つたのである。

斯くの如く敵陣を突破して前進したる獨第十八軍司令官キュヒラー大將は十四日朝ロッテルダム南方に到著し軍使を以てロッテルダム開城を要求した。蘭軍の之を拒絶するや、正午過ぎ約二十分に亙り三十機内外の急降下爆擊機を以て最も繁華なる市街の中心地を爆擊した。之がため一里四方の市街中心地域は爆彈による破壞と火災とにより全く廢墟と化し、住民の死者一萬七千名に達した。此の慘狀は蘭軍司令官の戰意を挫折せしめたのである。

市民は此の猛爆擊に度膽を抜かれ、やがては强力なる獨戰車隊の市街突入あらんを怖れて降伏し、次いで首都ヘーグの危機も迫つたので政府も軍隊も周章狼狽爲す所を知らず、今は是れ迄と總司令官ウィンケルマン將軍は全軍の降服を申し出で、女王ウィルヘルミナ及び皇族、政府員は英國軍艦に搭乘して英國に蒙塵した。戰亂の地

撃機を以て最も繁華なる市街の中心地を爆擊した。之がため一里四方の市街中心地域は爆彈による破壞と火災と
により全く廢墟と化し、住民の死者一萬七千名に達した。此の慘狀は蘭軍司令官の戰意を挫折せしめたのである。

市民は此の猛爆擊に度膽を拔かれ、やがては强力なる獨戰車隊の市街突入あらんを怖れて降伏し、次いで首都ヘーグの危機も迫つたので政府も軍隊も周章狼狽爲す所を知らず、今は是れ迄と總司令官ウインケルマン將軍は全軍の降服を申し出で、女王ウイルヘルミナ及び皇族、政府員は英國軍艦に搭乘して英國に蒙塵した。戰亂の地に君主に見捨てられた和蘭國民の失望悲歎もさることながら更に怨嗟の聲も頗る大なるものがあつた。和蘭軍の降伏した十四日は南方の戰場ではセダン附近で敵前渡河を强行して成功した直後であつた。斯くてライン河口以北の和蘭は獨逸の軍政下に入り英國攻擊に對し絕好の軍事基地を得るに至つた。卽ち英國海岸まで約二百吉米內外、倫敦まで約二百九十吉米となつたのである。

茲に於てヒットラー總統は翌十五日蘭國戰線に於て戰鬪せる陸、空軍將兵に對し其の卓絕せる戰績に關して感謝し特に死を見ること歸するが如き落下傘部隊及び空輸部隊の英雄的突入を賞揚した。

【評論】 和蘭は英佛白と協定して其の中立を維持するためと、一方英國に對する前哨の役割を演ずるため、五十萬の兵を動員したのであるが、僅々四日間に其の三分の一以上の死傷者を出して降伏した。これは今次大戰に於ける最も大なる損害を被つた犧牲國であると云へるであらう。

和蘭が若しも英國から救援軍派遣の約が無かつたならば或は最初から獨逸の要求に對して拒否することはしなかつたであらうと云はれてゐる。然るに彼は英國の例の老獪外交の手に乘つて此の禍を被つたもので、結局は弱小國の哀れさである。

和蘭の損害は單に軍隊だけに止まらず、主要都市は獨軍の爆擊によつて、見るも無慘な形骸と化し、國民の中

には「親英」であるとの嫌疑の下に直ちに死刑に處せられた者が多數あつたと云はれ、其他戰鬪のためにも莫大なる損傷を受けた。

和蘭が斯くもアッケなく僅か四日間にして降伏するに至つた原因の一として、獨軍の落下傘部隊の活躍が特記されるべきであらう。豫て獨逸の落下傘部隊の作戰的活用は各國によつて注目され種々な方面から興味をもつて期待されてゐたのである。其の新戰術落下傘部隊が獨軍によつて始めて和蘭作戰に使用され、それが非常な効果を收めて對蘭作戰を有利に導いたことは、獨軍の和蘭占領に於ける最も顯著なる主動の一部であつたと見られてゐる。

しかし單に其の效果を見て直ちに落下傘萬能論を唱へ其の價値を高く評價づけることは考へものである。今回獨逸落下傘部隊の大半は敵地に於て殺害された。しかも獨逸の成功した所以のものは所謂「第五部隊」の助力による。獨逸はかねてより和蘭國内に在る獨逸人及び獨系和蘭人と通謀し彼等をして落下傘部隊の武器となり手となり足となつて働かしめたのである。斯くして獨逸は敵中の「第五部隊」を作戰的に役立たせると云ふ劃期的な新戰術を用ひたのである。

今其の一、二の例を述べんか、ロッテルダム市に於てノルウェー船にて入港した獨逸人三百名は、ノルウェー人と稱して前日同市のホテルに宿泊したが、開戰と同時に一齊に蜂起して獨飛行機に對する合圖、誘導、通信並に放火等に從事した。

へーグ在住の獨逸人は開戰と同時に警視廳占領を企圖したが、失敗に歸したるを以て堅牢なる一家屋に籠城して獨軍の進入するまで戰鬪を繼續した。

今其の一、二の例を述べんか、ロッテルダム市に於てノルウェー船にて入港した獨逸人三百名は、ノルウェー人と稱して前日同市のホテルに宿泊したが、開戰と同時に一齊に蜂起して獨飛行機に對する合圖、誘導、通信並に放火等に從事した。

ヘーグ在住の獨逸人は開戰と同時に警視廳占領を企圖したが、失敗に歸したるを以て堅牢なる一家屋に籠城して獨軍の進入するまで戰鬪を繼續した。

「第五部隊」は到る處に於て蘭軍隊、其の後方機關、警官等を襲擊した。

是れ等の諜略部隊は所要の兵器は密かに若干準備した外、空輸部隊により補充されたやうである。

和蘭では氾濫の準備を整へてゐたが、獨軍の侵襲が餘りに突急な爲め之を施すの餘裕なく、且つ「第五部隊」の暗躍により妨害されたものとも見える。

英佛政府は開戰當初、全力を擧げて蘭白の救援に赴くべき旨を公表したが、唯其の聲のみ高くして事實に於ては僅かに七百五十名の英軍が海上輸送によりゼーランドのフリーシンゲンに上陸したると、機械化一師團内外の佛軍とが派遣されたに過ぎなかつた。勿論是れ等部隊の進出も蘭軍降服後であつて、之を救援することが出來なかつた。又若し戰線に出でたとしても所謂燒け石に水で何等の效果もなかつたであらう。元來英佛軍は既にフランドルの佛白國境に勢揃ひをしてゐたのであるが、前にも述べた如く總帥ガムラン將軍の氣が進まず、從つて軍隊の行動も慢々的に陷り遂に獨軍に機先を制せられ、狼狽して進出したものゝ、正々堂々たる行動が出來ず、統制を缺いた各隊各個、しかも頗る緩慢なるものであつた。故に蘭軍が是れ等英佛軍の救援を望んだ所でそれは到底不可能なことであつた。

和蘭の執つた防禦陣地の設定、軍の部署（充分判明せざるも）等は大抵戰略の法則に合し、軍司令官も降服を

拒絶する位の勇氣もあつたが、如何せん獨逸の最新兵器の新戰法殊に未だ曾つて見聞したことの無い落下傘戰術にかゝつては縱令氾濫が出來たとしても萬事絶望であつたのだ。古來幾度か和蘭を救つた氾濫戰術は最早現代では古典的戰法と化した。それに久しく戰爭の經驗なき和蘭は文化の弊に陷り歐洲に於ては獨逸の電撃戰に敗れ、東洋に於ては日本の超電撃戰により瞬く内に敗れ、今や國なき昔の海乞丐となり果てたのである。（昔和蘭人は海乞丐と云はれた）。

其二　白耳義方面

五月十日四時獨軍は地上軍の越境と共に空軍は作戰行動を起して白耳義國全域に向ひ殆んど同時に猛烈なる空襲を行ひ、首都ブラッセル及びアントワープ上空の如きは何れも百五十機以上の爆撃機及び驅逐機を以て完全に制空した。其の爆撃目標は主として各地の飛行場、兵營、ガソリンタンク、軍需工場、道路、鐵道、橋梁等の要點を狙つた。落下傘部隊及び空輸部隊をも活動したことは無論である。各市民は周章狼狽狂亂の渦中に投ぜられた。此の時何たる迂愚ぞや、白國外相は「獨軍が何等の警告もなくして各地を爆撃するとは何事ぞや」と其の不法を詰つたが、獨逸は答ふるに多々益々猛烈なる空爆を以てした。

茲に於て白國にては蘭國同樣英佛側に援軍を要請すると共に休暇中の將兵を召還し、獨軍からの强制勞働を避けしむる目的を以て十六歳以上三十五歳までの男子をフランドル地方に退避すべきを命令した。自力を以て中立を守ることが出來ず自國を戰場に供する弱國民の心情は眞に憐れむべきである。

【獨軍の猛前進】　最初主として白耳義の中心に向つた獨軍は第六軍であつて、其の左の第四軍及び第十二軍は南部白耳義に向つたが、戰局の進むに從ひ是れ等の二軍は北佛方面を突破する楔の役割を演ずるやうになつたの

茲に於て白國にては蘭國同様英佛側に援軍を要請すると共に休暇中の将兵を召還し、獨軍からの强制勞働を避けしむる目的を以て十六歳以上三十五歳までの男子をフランドル地方に退避すべきを命令した。自力を以て中立を守ることが出來ず自國を戰場に供する弱國民の心情は眞に憐れむべきである。

【獨軍の猛前進】 最初主として白耳義の中心に向つた獨軍は第六軍であつて、其の左の第四軍及び第十二軍は南部白耳義に向つたが、戰局の進むに從ひ是れ等の二軍は北佛方面を突破する楔の役割を演ずるやうになつたのである。

白國軍七十萬と稱せられたが最初戰線に參加せる者は恐らく三四十萬位のもので、既設の第一、第二陣地及び其他の都市を守備し殊に白國東境の堅要リエージュ要塞及び其の西南のナムール要塞の防禦に重きを置いた。リエージュ要塞は前にも述べた如く前世界大戰の時には獨逸の精鋭を以てしても之を陥れるに約一週間も要した有名な堅城である。されど現代兵器に對しては薄弱だと云ふので其の後白國にては新式築城法を施しリエージュ本城の周圍に約五里を離れて半圓形的にエベン・エマエルの裝甲大要塞とヌーフシャトー及びバチスの三分派要塞を築設して特に其の强化を圖つた。然るに、今度の戰にそれが僅か二日間で陥落して全世界を驚倒せしめた。

獨將ライヘナウの率ゐる第六軍は五月十日怒濤の如く國境を越え一は以て和蘭のペール陣地を突破してアントワープに向ひ、一はブラッセルに向ふべく突進したが、前記有名のエベン・エマエルの裝甲要塞に打ち當つた。そこで獨軍はグライダーの新戰術により之を陥落する端緒を作つた。

此のエベン・エマエル要塞はマース河及びアルベルト運河並に其の附近一帶を掃射するを以て先づ之を攻略するためマーストリヒト陣地を陥れ、次いで十日飛行機より猛烈なる爆撃を行ひ、此の機を利用し數機のグライダーに强力炸裂爆彈を携行せる決死隊八十餘名を乘せて大膽にもエベン・エマエル要塞內に落下せしめた。要塞內

には三百米平方の平坦地であり、グライダー兵はヴィッツヒ中尉の指揮を以て砲塔及び穹窖を爆破し約三十名になるまで奮戰勇闘し同堡壘の一角を占領してマーストリヒトに在る友軍の進來を待つてゐた。

　此の方マーストリヒト占領軍は直ちに勇敢なるミコッシュ中佐の率ゐる工兵大隊（四中隊）を同要塞に向け急派した。同大隊は敵彈雨飛の下を浮嚢舟によりてマース河を强行渡河し對岸の高さ約二十米もある堤防に登つて見ると、堤防と要塞の間は遮蔽物なく附近一帶氾濫となつてゐる。其の內夜に入り堡壘よりは照明彈を發射し且つ探照燈を照して猛射す。よつて又浮嚢舟と筏を用ひ翌十一日早朝、前日堡壘の一角を占領せるグライダー兵と連絡協力して堡壘內に突入し强力爆藥及び火焰發射器を以て守兵を攻擊した。守兵は爆破の震動に驚き逐次にトーチカ毎に降り遂に正午頃白旗を掲げて全員降伏するに至つた。此の戰に於て白軍の死傷約百名、捕虜約一千名であつた。

　難攻不落と思はれたエベン・エマエルの新式要塞が獨のグライダー兵に落されたと云ふ報道が、全世界の軍事專門家を驚かした。丁度マライ沖の海戰に不沈軍艦の稱ある英艦ウェルズ號が日本の空雷擊に擊沈されたと同じやうな衝動であつた。

　斯くて白耳義防禦の第一線に大穴が開いたのである。それのみならず他の獨の落下傘部隊は既にエベン・エマエル要塞の北側からアントワープに通ずるアルベルト運河の橋梁附近に落着し、約半數の損害をも顧みず奮戰敵を擊退してバッセルト渡河點を確保したので、地上部隊は十二日同運河の線を突破することが出來た。

斯くて白耳義防禦の第一線に大穴が開いたのである。それのみならず他の獨の落下傘部隊は既にエベン・エマエル要塞の北側からアントワープに通ずるアルベルト運河の橋梁附近に落着し、約半數の損害をも顧みず奮戰敵を撃退してバッセルト渡河點を確保したので、地上部隊は十二日同運河の線を突破することが出來た。

此の時獨軍はリエージュの本要塞並に他の分派堡に對しては單に一部を充て、強ひて力攻せず、ぐん／＼と西進を續けた。此の時左隣接の第四軍も相連繫してナムール方向に前進した。

十三日になると漸く佛の裝甲戰車一師團が戰場に現はれ、ナムール東北のチルルモン附近に於て獨戰車隊と大遭遇戰を演じたが、佛の戰車は、砲を有し且つ輕快堅甲の獨戰車の敵ではなかつた。殊に獨の急降下爆撃機の爆撃を蒙り多大の損害を被りて西方に敗走した。之は開戰以來最初の獨佛戰車大部隊の衝突であつて、果せる哉戰車戰術の大家の稱ある獨大將ライヘナウの勝利に歸したのである。

此の日リエージュ要塞の一部陷落して城頭に獨逸の旗が飜つた。（十九日全部陷落）。白軍はリエージュ附近の堅壘陷り第一陣地たるアルベルト運河の線も敗れ、又來援の佛戰車隊も潰敗したので國境防禦の企圖も空しくなり、已むなくアントワープ――ナムール要塞に連なる第二陣地たるディールの線に向ひ退却し辛うじて英軍により收容せられた。

十四日獨第六軍は退却する敵を急追してディール敵陣地の線に達し其の一部を以て首都ブラッセル南方に迂回して之を衝かんとするの態勢を執つた。ブラッセルは十日以來晝夜の別なく連日獨機の空襲を受けた。白國はブラッセルを無防備都市と聲明せるも、實際英佛軍の通過其他軍事的目的に利用しあるを以て獨軍司令官ライヘナウは依然爆撃を續行する旨を警告した。

此の日北方に於ては蘭軍は降服し、南方に於ける獨軍は佛白國境を各所に於て突破し國境都市セダンを占領し

てマジノ線の一角を破り、各方面共破竹の勢ひを以て敵を壓倒しつゝあつたのである。斯くして五月十四日は本會戰に於ける重大なる轉換期を劃した。

其の間英軍はディール線に到達して戰つたが功なく、十五日に及んで獨軍はブラッセルに肉迫し、十六日早朝にはディール防禦線を數箇所に於て突破し、次いでルーヴァンを陷れた。首府ブラッセルは愈々危險となつたので、白耳義政府は十六日最高軍司令部と協議の上、北海々岸のオスタンドに政府を遷した。それでブラッセルは防禦を撤し無抵抗の態度を執つたので兵火を免れ、翌十七日遂に獨軍の無血占領する所となつた。開戰一週間目である。ワーヴル市も亦此の日を以て陷落した。

白都ブラッセルの落ちた十七日セダン附近のマジノ線が約百吉米の廣大な地域に亙つて破れたので、多數の獨軍は潮の如く此の破口より佛國領内に侵入した。十八日には堅城アントワープも陷り、白耳義戰線は獨軍の電擊作戰によつて英佛聯合軍必死の防戰にも拘はらず壓倒されつゝ敗戰に敗戰を續け、七十萬の白軍が全力を舉げての抗戰も獨軍に對しては唯敗退の一路を辿るばかりであつた。

【聯合軍の新陣容】　五月十八日は實に聯合軍にとつて重大な日であつた。北に於てはブラッセル陷りアントワープは破れ、南に於てはセダン附近に於てマジノ線に大穴が開いた。是れ等の情報は彼等には青天の霹靂であつた。英の首相チャーチルは堪りかねて巴里に飛んで來てレイノー首相と鳩首協議し更に一個師團の增援を約した。それで連戰連敗しかも難攻不落と恃んでゐたマジノ線が破れたとあつては政府の威信も大いに動搖して來た。

此の五月十八日佛國では民望の厚いヴェルダンの勇將當年八十四歲のペタン老元帥を起して副首相となし、レイノー首相自ら陸相を兼ね、氣の合はない今までの陸相ダラディエを外相に移し、翌十九日ガムラン將軍を罷免し

此の五月十八日佛國では民望の厚いヴェルダンの勇將當年八十四歳のペタン老元帥を起して副首相となし、レイノー首相自ら陸相を兼ね、氣の合はない今までの陸相ダラディエを外相に移し、翌十九日ガムラン將軍を罷免しウェーガン將軍を聯合軍總司令官に任命して内閣を强化し、以て將に崩れんとする大廈を支へようと試みた。

ウェーガン將軍は本年七十三歳、矍鑠たる健康の持主である。一九三五年まで參謀總長の要職に在つたが、今度召還せられるまでシリヤの駐屯軍を指揮してゐた。ガムランとは全然反對の性格の持主で、防禦戰を好まず、機動戰を重んじた。

此の新陣容出現の報に接した佛國民は、今更ながら事態の容易ならざることの認識を一段と深めざるを得なかつたのである。

十九日朝ペタン元帥とウェーガン將軍とは一緒に首相官邸に現はれ、暫くの間何事か協議してゐた。この僅かの時間に總てが決められたのであらう。同夜ペタン元帥は陸軍省に登廳した。そして三十分後にはウェーガン將軍はレイノー兼攝陸相の部屋へ大股に二段づつ階段を上つて行つた。ウェーガン將軍は早速こゝで佛軍最高指揮者として軍首腦者を集めて今後の作戰に關して初協議を遂げたのであつた。ペタン元帥に配するにウェーガン將軍、此の名コンビは現在の佛蘭西が生み出し得る最强の陣容として佛全國民から絶大の信頼と期待を受け、最後の望みを此の兩人にかけた國民は、心强さを幾分取り戻しながら喝采と拍手を送つたのである。

ペタン元帥は非常に責任感强く自己に課せられた職責は飽くまでも徹底的に果し了へる底の人で、清濁併せ呑

む氣宇宏大で且つ溫情の將軍である。ウェーガン將軍は第一次大戰に於てフォッシュ元帥の股肱として信頼され、元帥は其の臨終に際して「若し佛蘭西が再び危殆に瀕することあらばウェーガン將軍の出馬を請へよ」と遺言したことを想起されるのである。ウェーガン將軍の先見の明は有名なもので、將軍は如何に雜然たる事物の混淆の中からも眞實の事を明敏に選り出す、そして瞬間に決定を與へる才能を持つてゐる。

しかし現在の大勢では、縱令ペタン元帥、ウェーガン將軍の出現によつて果してどれだけ戰局の挽回を期し得るであらうか、ウェーガンは幕僚から戰況を聽取して「嗚呼少し遲過ぎた」と歎息したさうである。されど彼はやれるだけやらうと決心して此の難局の關頭に起つた。

【獨軍の敵陣突破】 アントワープよりナムールに亙るディール線を失つた佛英及び白軍は五月十八日其の後方のガンからモーブッシュ要塞に亙るダンドル河の線及び其の以南の線に踏み止まり、非常に混雜しながらも大體に於て左から第七軍、白軍、英軍、第一軍、第九軍、第二軍と云ふ順に並べて頑强に防戰した。獨軍はナムール要塞の如きは一部隊を之に充てゝ後方に置き（二十三日に陷落した）、全力を擧げて前面の敵を攻擊し、勇將ライヘナウはイープルに向つて敵を突破せんと新銳部隊を猛烈に注ぎ込んだ。時に佛軍は始めて最新型の大砲を用ひ陣地を乘り越えて反擊を反復した。之が爲め流石獨軍步兵の攻擊も遲々として發展しなかつたが、怪物の如き獨軍の機械化部隊の殺戮的進擊は怒濤の如く押し寄せた。それでモーブッシュ要塞地區の如きは、此の佛軍の新銳武器によつて獨軍の步兵部隊は高さ六尺の死體の山を築いた。其の上を獨戰車群は乘り越えて猛進する様は全く悽愴酸鼻の光景であつたらう。此の猛攻强擊には佛軍の力戰も遂に及ばずして後退の已むなきに至つた。

佛軍は漸くの如く防戰の死力を盡したが、英軍は之に反し戰局の前途を見切りて早くも海峽の諸港に向

陣地を乘り越えて反撃を反復した。之が爲め流石獨軍歩兵の攻撃も遲々として發展しなかつたが、怪物の如き獨軍の機械化部隊の殺戮的進撃は怒濤の如く押し寄せた。それでモーブッシュ要塞地區の如きは、此の佛軍の新鋭武器によつて獨軍の歩兵部隊は高さ六尺の死體の山を築いた。其の上を獨戰車群は乘り越えて猛進する樣は全く悽愴酸鼻の光景であつたらう。此の猛攻强撃には佛軍の力戰も遂に及ばずして後退の已むなきに至つた。

佛軍は斯くの如く防戰の死力を盡したが、英軍は之に反し戰局の前途を見切りてか早くも內々海峽の諸港に向ひ退却の準備に着手し、白軍をして其の收容に任ぜしめるやうな態度を示した。英軍の此の態度に對し白耳義軍では心中窃かに不快の念を懷くに至つた。斯う云ふことは英軍の得て行ふ所の常套手段であつて、之が爲め爾後聯合軍の作戰は協同を缺き逐日破綻滅裂の運命に落ち込んで行くのであつた。

左方マジノ線を突破し怒濤の如く西方に突進した獨軍の裝甲快速兵團は十九日にはアミヤン、二十日にはアブヴィルと云ふ風に全く無人の境を行くが如くにソンム河に沿ひ西進し、二十二日には遂にソンム河口の海岸に達して聯合軍を南北に中斷して了つた。即ち五月十八日の戰線はガンの東方からモーブッシュの東方を經てサンカンタンに至り、それより東に廻りラ・フェールの北を過ぎセダンの南に亙つてゐたものが、二十二日頃にはガンの東邊からツルネーを經てカンプレーに至り、それより西に折れアラス、サンポールを經てスカルプ河口に至ると云ふ狀況で僅か二、三日の間に一大變化を來たしたのである。

敵を中斷すると共に獨軍は時を移さず南方巴里方面に對しては一時守勢を執り、北方フランドル方面に在る敵約百萬を包圍殲滅せんと南、東、北の三方より鐵桶の包圍圈を縮めて行つたのである。

【白耳義軍の降服】 かく急速に壓縮された包圍圈內の百萬英佛白軍は如何にして此の危地を脫出するかに白耳義作戰は歸納される所となつたが、大局は聯合軍の敗色を益々濃くする許りで白耳義作戰も三週日にして早くも

大詰へまで來たのである。

聯合軍司令官ウェーガンは何とかして此の危機を脫却せんと彼一流の賭戰を計畫した。それはソンム方向に楔狀的に突出した獨軍を南北より挾擊すると云ふのである。卽ちアミヤン南方に集結中のフレール軍と、北方にある英佛軍とを以て之に充てると云ふ案で、其の脫出方面はバポーム――カンプレーの線である。此の際白耳義軍をば後方に止めて置いて英佛軍の此の脫出運動を掩護させると云ふのであつて白軍にとつては洵に割に合はぬ不快な役目である。

此の前日卽ち五月二十一日ウェーガンは戰場に白耳義王に謁し、白軍司令官の位置を去られるやうにと勸告して言下に斥けられ、又白軍を佛領內に移動すべきを要望したが之も拒絕せられた。其の時旣に王の胸中には强國の走狗に甘んぜず、自國本位に進退しようとの決心が動きかけてゐたやうである。それで白軍々部の間には若しも退却の已むを得ざる場合には寧ろオステンド――ダンケルクに向ふべきであると云ふ意見を持つてゐた。之は英佛軍の南方への進擊とは全く正反對の行動である。此のやうに聯合軍の陣營には摩擦と相剋が眼に著くやうになつた。

兎に角ウェーガンの挾擊命令は下されただらうが、フレール將軍の南方軍は集結終らず。又英軍は佛軍に見切りをつけて竊かに撤退の準備に取りかゝらうとした所に、獨軍の猛進擊と急降下爆擊を蒙り戰意を挫いて北方へ退却した。此の時英軍は英軍總司令部より退却せよとの指令を受けてゐたと云はれた。この樣に人の和を失つては聯合軍は解體したも同樣、擧國一致の獨軍に對しては到底勝目がなかつたのである。

獨軍の包圍圈は段々に縮つて來た。北方ではガンの陣地は破れ、ツルネーは取られ、南方ではロレット山の險

兎に角ウェーガンの挾撃命令は下されただらうが、フレール將軍の南方軍は集結終らず。又英軍は佛軍に見切りをつけて竊かに撤退の準備に取りかゝらうとした所に、獨軍の猛進擊と急降下爆擊を蒙り戰意を挫いて北方へ退却した。此の時英軍は英軍總司令部より退却せよとの指令を受けてゐたと云はれた。この樣に人の和を失つては聯合軍は解體したも同樣、擧國一致の獨軍に對しては到底勝目がなかつたのである。

獨軍の包圍圈は段々に縮つて來た。北方ではガンの陣地は破れ、ツルネーは取られ、南方ではロレット山の險陷り、カレーの要衝が落ち、英佛軍は獨軍を挾擊の爲め前進どころか、唯々退却に焦躁する許りであり、英軍の如きは手廻し早く海濱から乘船を開始した。斯くしてウェーガンの進擊命令も實行されずに終つたのである。

此の際に於ける白耳義軍はそれ等英佛軍の退却を掩護する割の惡い場面となつた。玆に於て白耳義王レオポルド三世は獨軍の破壞的威力の前に、より以上の抵抗を無意義と痛感され部下の進言をも斥け、五月二十八日の朝五十萬の兵を率ゐて降服し獨軍によつて武裝を解除されたのである。

白耳義王は何故降服されたか、傳へられる處によれば英國は豫ての協定通りの援兵を大陸に送らず、しかも最後に白耳義の要望する增援隊すらも甚だ僅少なものしか送らなかつた。加ふるに英空軍の活躍は全く問題とするに足らず、而して戰況は敗退を餘儀なくせられ、五十萬白耳義軍は遂には英佛軍のために犧牲に驅使せられんとするに至つた。國亡びて尙ほ且つ五十萬の軍隊を無慘にも見殺しにすると云ふことは國王として愼重に考へられたことであらうし、聯合軍との最後の協商に於ても此の大勢を動かす何ものも得られず、遂に意を決して獨軍に降服されたものと云はれてゐる。

玆に於てフランドル戰線は一擧にして白軍の降服解體によつて大きな穴があき、英佛軍にとつては全くこれこそ半身を奪はれた以上の大打擊で、此の大穴を如何にして防ぐかと云ふことは到底不可能のことであつた。フラ

ンドルの戰はこれで勝負が決つたと云つてもよい。殘る問題は只此の戰線で包圍されてゐる英佛軍が、どれだけダンケルクから海を渡つて生還出來るかと云ふことであつた。

此の日卽ち二十八日佛首相レイノーは「レオポルド王は戰爭の眞只中に、彼の救援に赴いた英佛軍に一言の挨拶もなく武器を投げ出した。此の如きことは史上未だ曾つてなき奇怪事である」と曇つた聲で放送した。

之より愈々ダンケルクの殲滅戰となるのであるが、それは次章に讓るとして、以上和蘭、白耳義の二國は僅か十八日間にて英佛と袂を別つて了つたのである。

【評論】 白耳義の國防陣地の施設そのものは合理的で至當と云へよう。只白軍の用法に就き一言の要がある。英佛軍當局は最初白軍を單に英佛軍の前進を掩護せしむる爲めに既設陣地を據守せしめたやうである。白軍が小兵團ならば或はそれにても可ならん、されど白軍は七十萬もあると云ふ大兵團であれば、もつと之を戰略的に有利に使用すべきであつた。

然らばどうするかと云へば側面的陣地を取らしめるのである。卽ちアントワープを中心として右はシェルテ河からガン市に、左はトルヌート運河から和蘭のブレタ市附近に亙り陣地を占め、そして既設の第一、第二陣地には其の要點にだけ配兵し、リエージュ、ナムールの要塞は之を固守せしめるといふ方案である。つまりリエージュ、ナムール要塞線とブレタ、アントワープの陣地を據守して敵を其の中間に導き、英佛軍を以て之を邀擊せしめると云ふのだ。

今回白軍の據つた第一陣地は獨軍の位置から非常に近く、之に反し白佛國境にある英佛軍からは其の三倍以上の遠距離にあるを以て英佛軍の到著に先だち白軍の擊破せられる懼れは充分であつた。實際も亦英佛軍の來たる

は其の要點にだけ配兵し、リエージュ、ナムールの要塞は之を固守せしめるといふ方案である。つまりリエージュ、ナムール要塞線とブレタ、アントワープの陣地を據守して敵を其の中間に導き、英佛軍を以て之を邀撃せしめると云ふのだ。

今回白軍の據つた第一陣地は獨軍の位置から非常に近く、之に反し白佛國境にある英佛軍からは其の三倍以上の遠距離にあるを以て英佛軍の到著に先だち白軍の擊破せられる懼れは充分であつた。實際も亦英佛軍の來たるに先だち擊破せられたのである。

然らば第二陣地のディール線はどうであつたかと云へば此の線には英佛軍は逐次に到著したが、第一線陣地を破り怒濤の如く猛進する獨軍に氣を呑まれて忽ち突破せられて了つた。斯うなると戰勢の挽回は仲々むづかしく五里や十里後退した所で到底踏み止まつて陣容を建て直すことは出來ない。

然るに聯合軍はディール線の直ぐ後方のダンドル河の線に止まつて抗戰した。百萬もあらうと云ふ大軍の退却としては其の要を得ないものである。此の際は宜しく前大戰にジョッフル元帥が國境戰に敗れた軍を、其の後方六、七十里のマルヌの線にまで下げたと同樣、少くも白佛國境のマジノ延長線か若しくは思ひ切つてソンム河の線まで下げるべきであつた。されば敵に中斷されず、從つて包圍殲滅の厄にも陷らずに、全軍を統一して獨軍に對抗することが出來たであつたらう。最初の一歩を誤つた禍は遂に全體の破滅を招くに至つたのである。

以上はつまり聯合軍總司令官の統帥に對する非難であるが、白軍としても全般の狀況を大觀して獨自の戰略的行動を執るべきであつた。然るに彼は只々英佛の命これ從ふと云ふ風で、七十萬と云ふ大軍を擁しながら只々引き廻はされた形であつた。其の結果は遂に英佛と絕緣して獨軍に降服すると云ふ運命となつたのである。

其三　北佛方面

和蘭、白耳義、北佛の三方面の戰は一個の作戰計畫の下に行はれたものであつて、別々に記述するのではないが、便宜上和蘭方面、白耳義方面と分けて說述し茲では北佛方面に及ぶのであるが、獨軍進攻の重點は此の北佛方面の戰局にあるのであるから、本項に於ては總括的に戰況を說述する都合上前述のそれと若干重複の點あるやも知れない。

前にも述べた如く此の西部戰線に於ける獨佛兩軍の戰略展開は大體次の如くであつた。今之を北より云へば、

一、獨軍

第十八軍、第六、第四、第十二、第十六、第一、第七軍の順を以て、北は北海々岸より南は瑞西國境に及んでゐる。

二、佛、英軍

第七軍、英軍、第一、第九、第二、第三、第四、第五、第八軍と云ふ順に兩軍相對峙し、和蘭軍、白耳義軍は各其の國土の防衛に任じてゐたのである。

つまり英佛側は白蘭兩國軍を前哨の如く使用し自國軍を以て大凡北はダンケルクから南は瑞西國境に亙る大、小マジノ線に據つてゐたのである。(モンメデー以南の本マジノ線を便宜上大マジノ線、其の以北のマジノ延長線を小マジノ線と假稱す)。之に對し獨軍は國境のジーグフリード線に鋒を横たへ今にも飛び掛からんとする氣勢を示してゐた。

東西何れの軍が先手を打つて攻撃前進すべきやは天下の注目する所であつた。獨軍の攻勢は固より期する所であるが、英佛聯合軍としても、彼等は機先を制して豫定のルール侵襲を行ふのではあるまいかと思はれたのであ

小マジノ線に據つてゐたのである。（モンメデー以南の本マジノ線を便宜上大マジノ線、其の以北のマジノ延長線を小マジノ線と假稱す）。之に對し獨軍は國境のジーグフリード線に鋒を横たへ今にも飛び掛からんとする氣勢を示してゐた。

東西何れの軍が先手を打つて攻撃前進すべきやは天下の注目する所であつた。獨軍の攻勢は固より期する所であるが、英佛聯合軍としても、彼等は機先を制して豫定のルール侵襲を行ふのではあるまいかと思はれたのである。前大戰に於ても、佛軍は初期に獨軍の爲め機先を制せられ、作戰軍を横に移動した失敗もあるから、今度こそは白、蘭兩國軍を前哨的に有利に使用し、獨軍の未だ起たざる内に攻勢に出づるであらうと見られたのである。又事實さう云ふ考へでもあつたらうが、それがガムラン將軍の氣乘り薄の爲めか、準備未了の爲めか、或は其他の事情の爲めか、遂に獨軍の爲めに機先を制せられ開戰第一日から、しどろもどろの足並となつて敗兆を示したのである。

前大戰と今次の戰とに於て全然異つた一つの觀點がある。前大戰の時には獨軍は左翼軍を樞軸として右翼諸軍を左方に大旋回させたのであつたが、今度の獨軍は然らず、其の樞軸部に當る軍が主力となつて眞つ先に突進してセダン附近を突破したのである。之は恐らく佛英側の意外とした所であつたらう。是れ等に關する評論は後に讓るとして、佛軍側に就き一言すべきことがある。

ガムラン將軍はナムール要塞以南セダン附近に至る間は地形錯雜の上、マース河の險あるので敵來攻の虞れ少しと判斷して此處に比較的凡將と見られたコラップ大將の率ゐる第九軍を配置し、而して最左翼には勇將の聞え高き壯年のジロー中將の第七軍を備へた。之は前大戰に獨軍が旋回外翼に勇猛なフォン・クック大將の第一軍を配したと同じ手法である。（ジローは戰後アフリカに於て親米政權の主席となつた人）。

元來ならば英軍を外翼に置き海岸との連絡に便ずるのが至當であるが、攻勢外翼の重要性を認め、劣弱なる英兵を斥け特に勇敢なるジロー軍を選抜充當したものと見られる。これ程までにルール地方に向ひ攻勢的の企圖があつたならば、小マジノ線附近に居らずに初めからアントワープ――ナムールの線、即ちディール陣地に進出し直ちに進擊し得る態勢にあるべきであつた。然るに餘りに後退してゐた爲め遂に前線にある白蘭軍を好機に援助することが出來ず、其の敗渦の中に捲き込れた形となつたのである。

【獨軍の攻擊開始】　一九三九年十月西部國境に配置せられて以來約七箇月に亙り、十數年來なき寒氣の中に訓練を重ね、周到なる準備を完了した獨陸軍約二百萬は一九四〇年五月十日未明より粛々として攻擊前進を開始した。其の勢ひの壯凄なる白蘭佛の諸國を呑まずんば止まざるの概を示した。北海よりモーゼル河畔に達する約四百吉米の正面に亙り突如として國境線を侵し到る所蘭、白國境守備隊を擊破して豫定の如く進擊を續けた。

當日の壯擧は空軍の電擊的活躍であつた。アントワープ、ブラッセル、ロッテルダムは勿論メッツ、ランス、リヨン、ディジョン等々の都市を始め、敵飛行場、主要なる鐵橋、道路、建築物等を爆破して敵の心膽を寒からしめ、且つ敵飛行機を多數擊墜破し殊に落下傘、グライダーを飛ばして偉功を奏する等、獨軍の新兵器、新戰法には全世界を驚倒せしめた。和蘭の如きは開戰第一日より其の弱態を示し制空權を喪失して哀みを英佛軍に急請した程である。

獨作戰軍は前述の如くA、B軍の二集團であるが之には特に裝甲兵團を附屬した。

しめ、且つ敵飛行機を多數撃墜破し殊に落下傘、グライダーを飛ばして偉功を奏する等、獨軍の新兵器、新戰法には全世界を驚倒せしめた。和蘭の如きは開戰第一日より其の弱態を示し制空權を喪失して哀みを英佛軍に急請した程である。

獨作戰軍は前述の如くA、B軍の二集團であるが之には特に裝甲兵團を附屬した。

一、B軍集團には

　第一兵團（裝甲一師團）

　第二兵團（裝甲二師團）

二、A軍集團には

　第三兵團（裝甲二師團）

　第四兵團（之は裝甲兵團の主力でクライスト大將の率ゐるもの、次項說述）

以上の如く裝甲兵團を按配々屬した。而して本作戰の重點はフォン・ルンドステット上級大將の率ゐるA軍集團にあるを以て、此の集團内には特にフォン・クライスト騎兵大將の裝甲第四兵團の威力を附けたのである。從つて此の兵團の活動成績の如何は今回戰爭の勝敗を決する重要なる關鍵をなすものであつた。故に之が指揮官の人選、編成等に最大の努力と注意を拂つた。兵團長クライスト大將始め軍團長グーデリアン大將、同ラインハルド中將の如き皆波蘭戰爭に裝甲兵團長として驍名を馳せ鐵十字勳章を授けられた殊勳者である。

先づ他兵團の活動の概要を述べ、然る後重要なるクライスト大將の第四裝甲兵團の行動を述べるであらう。

其一、第一裝甲兵團は最右翼第十八軍方面に活動し五月十二日ハーリンゲンに達して其の任務を了へ、獨軍をして和蘭北西海岸地方の占領を安全ならしめ、爾後南方主力方面に轉用せられたやうである。

其二、第二裝甲兵團は第六軍方面に活動し主力を以てアントワープに突入し、一部を以てロッテルダムに向ひ

同地に落着せる友軍の落下傘部隊に協力して同市の占領を確實ならしめた。其の後第三裝甲兵團と連繫してブラッセル周邊にある敵を攻撃した。

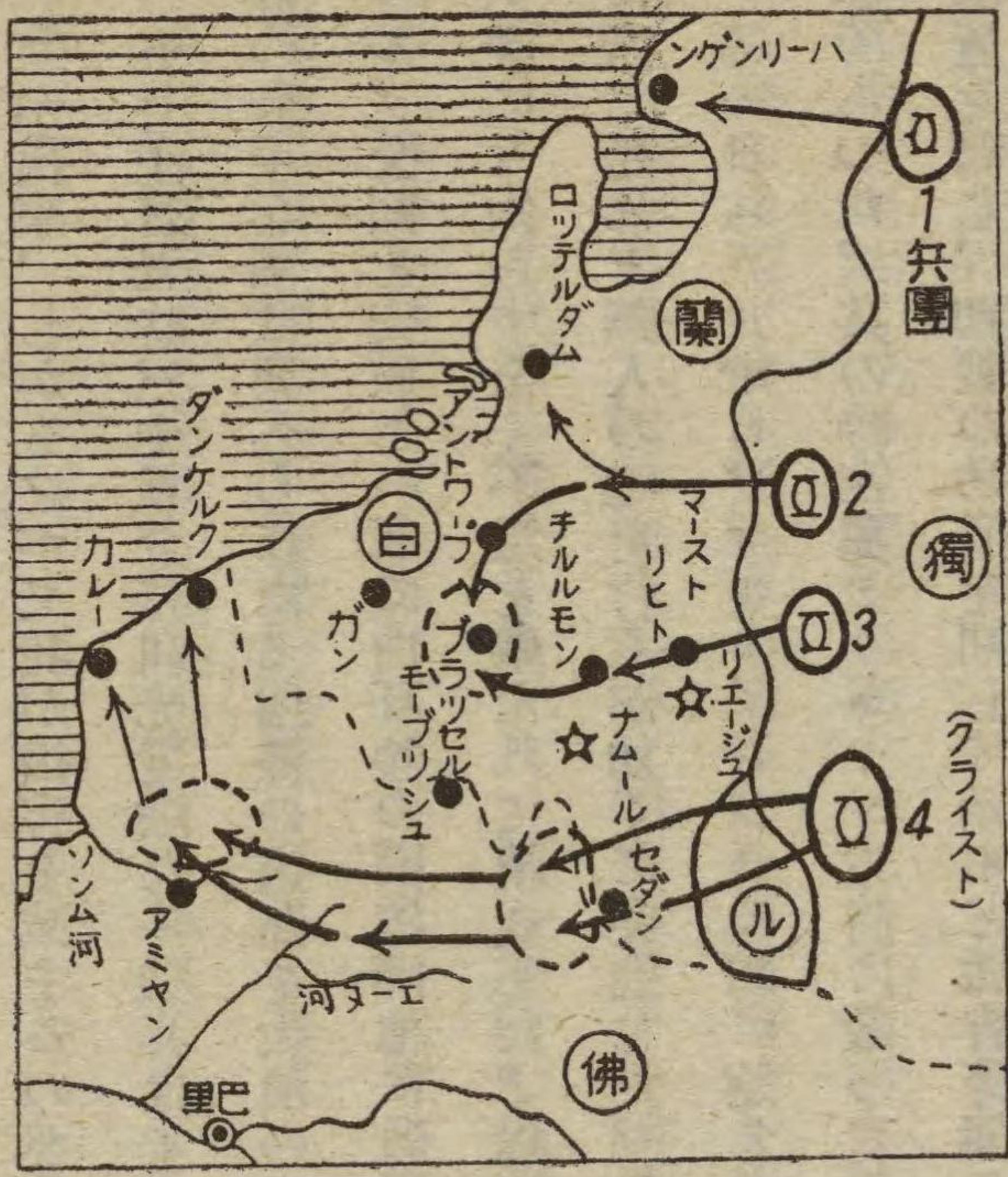
其三、第三裝甲兵團は第四軍方面に活動し第一日に迅速勇敢に行動してマース渡河點マーストリヒトを占領し次いでアルベルト運河の橋梁を收め、十三日にはチルルモン附近に於て始めて佛軍戰車一個師團（戰車約千五百乃至二千輛と報ぜらる）と激烈なる戰鬪を交へ、地上陸兵及び急降下爆撃機の協力により多數の損害を敵に與へて撃退した。其の後前記第二裝甲兵團と連繫して附近の敵を掃蕩してブラッセルに無血入城し、十八日には同市西南方に於て敵の戰車攻撃を邀撃して之を撃退し其の附近に於て隊伍の整頓を終りたる後、南方主力方面に轉用せられたやうである。次は主力たる第四裝甲兵團の行動である。

【クライスト裝甲兵團】　獨軍の主力A軍集團の任務はルクセンブルグ方面から直路西進して海岸に達し敵を中斷し、而して白耳義及び北フランスに在る聯合軍を包圍殲滅するにあつて、其の先陣は騎兵大將クライストの率ゐる裝甲兵團である。（三軍團編成、九師團）。

兵團長　クライスト騎兵大將
參謀長　ツアイトラー大佐
第一線軍團　長　グーデリアン裝甲兵大將
　四師團

参謀長　ツァイトラー大佐
第一線軍團　長　グーデリアン裝甲兵大將
四師團

第二線軍團　長　ラインハルド裝甲兵中將
三師團



獨裝甲兵團の行動

第三線軍團　長　不明
二師團
以上計九師團
內譯　裝甲師團　五
機甲師團　四
車輛數　四萬五千

以上のやうな大兵團は遠い昔の騎兵團に相當して考へられるが、第一次世界大戰當時のやうな近代の騎兵團とは似もつかぬもので、獨力會戰を行ひ且つ勝敗を決するだけの戰闘力を有してゐるのである。但し之には空軍の協力を絶對に必要とすることは申すまでもない。

勿論其の指揮官の性格は敏速なる觀察、進取の精神、果敢斷行等、騎兵的性格に他ならないのである。

攻撃前進の直前、軍司令官フォン・クライストの下した命令を見ると、大將其の人の騎兵的性格が明かに表はれてゐる。曰く、

「神速果敢は裝甲軍の生命で戰勝の要素である。マース河に達するまでは絕對に休止してはならぬ。（註マース河畔まで約三十里）晝夜を別たず、左右を顧みることなく前進を强行し、斷乎たる意志を以て敵の最初の狼狽と混亂とを飽くまで利用し敵を次から次へと急襲し對策を講ずるの遑なからしめよ。我等の唯一の目標は一部をして急襲的に且つ速かにマース河を渡河せしむることだ。斯くして始めて我が任務を遂行することが出來、しかも之が又我が損害を減ずるの要訣である」。

五月十日五時三十五分特別先發隊たる獵兵はルクセンブルグの國境を突破し阻絕の撤去に著手した。それより此の裝甲兵團は與へられたる四條の道路を大浪の寄せるが如き勢ひを以て一波一波と驀進し忽ちの裡にルクセンブルグ公國を突破し一氣に白耳義の國境陣地に殺到した。どうした事だらう。白兵は斯くの如き猛進擊のあるのを夢にも知らず全く不意を擊たれて潰走した。爲めに獨裝甲兵團はそれこそ左右を顧みることなく敵の狼狽するに乘じ殆んど無人の境を行くが如くに突進した。勿論大將フォン・クライストは最先頭の軍團に在つて前進した。

第一日（五月十日）マルトランジュの線に達した。此處までは約十四里であるが、クライストは尙ほ不滿の思ひであつた。其の時左翼カリニャン方面に敵の有力なる裝甲部隊出現せりとの飛行通信に接し直ちに之に對する處置を講じ、初戰の功名を期して殆んど徹宵警備してゐたが翌十一日の朝になつて其れが誤報であることが判明した。そこで直ちに又出發前進となつた。

愈々アルデンヌ大森林の障碍地内に入り、ヌーフシャトーの隘路に取り掛かつた。クライスト大將は最初此の障碍地帶内の攻擊動作困難なるを豫期し大規模の包圍を考案してゐたが、實際は案外容易に正面突破をなし得、早くもセダンの北方セモア河の線に進出した。

處置を講じ、初戰の功名を期して殆んど徹宵警備してゐたが翌十一日の朝になつて其れが誤報であることが判明した。そこで直ちに又出發前進となつた。

愈々アルデンヌ大森林の障碍地內に入り、ヌーフシヤトーの隘路に取り掛かつた。クライスト大將は最初此の障碍地帶內の攻擊動作困難なるを豫期し大規模の包圍を考案してゐたが、實際は案外容易に正面突破をなし得、早くもセダンの北方セモア河の線に進出した。

此の河谷は深く入り込み、それに密林地帶で敵の防禦設備があり、道路は處々爆破されて行進困難なる所へ、白耳義の森林兵、佛の裝甲兵團、アフリカ兵、自轉化騎兵師團等が諸方面より出沒抵抗し獨軍も隘路內で一時危殆に瀕したが、恰も獨空軍が適時此の窮迫狀況を偵知して緊密なる協同振りを發揮し、特に急降下爆擊機は敵の頭上を急襲し以て同兵團の進路を開拓し、平時訓練の成果を發揮した。

五月十二日裝甲兵團はアルデンヌ障碍地帶を突進し行く〳〵敵を蹂躪し當日夕刻には其の先頭を以て同山地の南端に進出しマース河を望むことが出來た。將兵は遙かにセダンを望見して一八七〇年役、佛帝ナポレオン三世降伏の史事を回想して無量の感慨に打たれた。

此の夜敵飛行機は屢々爆彈投下を行ひ、グーデリアン將軍の司令部は爆擊を受け爲めに其の位置を移動した程であつた。

此の時此の裝甲大兵團は數條の道路を蜿蜒として行進中で、其の後尾である第三の軍團の先頭は遙か後方のライン河畔コブレンツ附近を出發する所であつた。マース河畔からライン河畔迄の距離約二百五十吉米である。如何に大部隊の行動なるかを知ることが出來よう。昔波斯の大軍がヘレスポンド海峽(今のダーダネルス海峽)を通過して希臘遠征の時の壯觀が想起される。

【マース河の渡河】　此の夜兵團長フォン・クライスト將軍はマース河を指顧の間に望み其の渡河に關する時機に就いて考究した。此の時の案は二つある。卽ち明十三日現在の兵力を以て渡河を決行するか、又は後方に在る兵團全部を招致し且つ渡河に要する材料並に砲兵の來著を待つてするかの二案である。クライスト將軍は奇襲の利を重視して第一案を採り、遂に渡河の實施を明十三日と決定して所要の命令を下した。玆にもクライスト將軍の騎兵的特質が現はれてゐる。

此の時兵卒は疲勞の極全く無感覺の狀態であつたが、クライスト將軍は之を鞭撻激勵して終夜全車輛點燈の儘渡河に關する諸準備を整へ、翌十三日天明と共に百機より成る空軍の協力と相俟つて猛然敵前渡河を始めた。

彼我の砲擊、爆擊の轟々漠々たる下に、獨軍は浮囊、舟筏、門橋、水泳等を以て決死渡河せんとす。敵は近く對岸にありて狙擊猛射し、其の數十百のトーチカの銃眼より火を吐けば、獨空軍の爆彈は之を粉碎飛散せしめる等實に凄絕壯絕の激戰であつた。

集團軍司令官ルンドステット大將以下の高級指揮官皆河岸に進出して軍の渡河を激勵した。

グーデリアン裝甲軍團は三箇所で渡河を試みた、其の地點及び成果は次の如くである。

一、ヴイレット附近

敵の頑强な抵抗を受け大なる損害を受けたが兎に角成功した。

二、セダン附近及びバゼール南方

渡河に成功したが、バゼール南方地區に於ては渡河後敵の有效な側射を受けて失敗。

三、ドンシェリー附近

一、ヴイレット附近

敵の頑強な抵抗を受け大なる損害を受けたが兎に角成功した。

二、セダン附近及びバゼール南方

渡河に成功したが、バゼール南方地區に於ては渡河後敵の有效な側射を受けて失敗。

三、ドンシェリー附近

渡河失敗、よつて此の部隊は更にヴイレット附近より渡河し、東方よりドンシェリーを攻撃して之を奪取した。

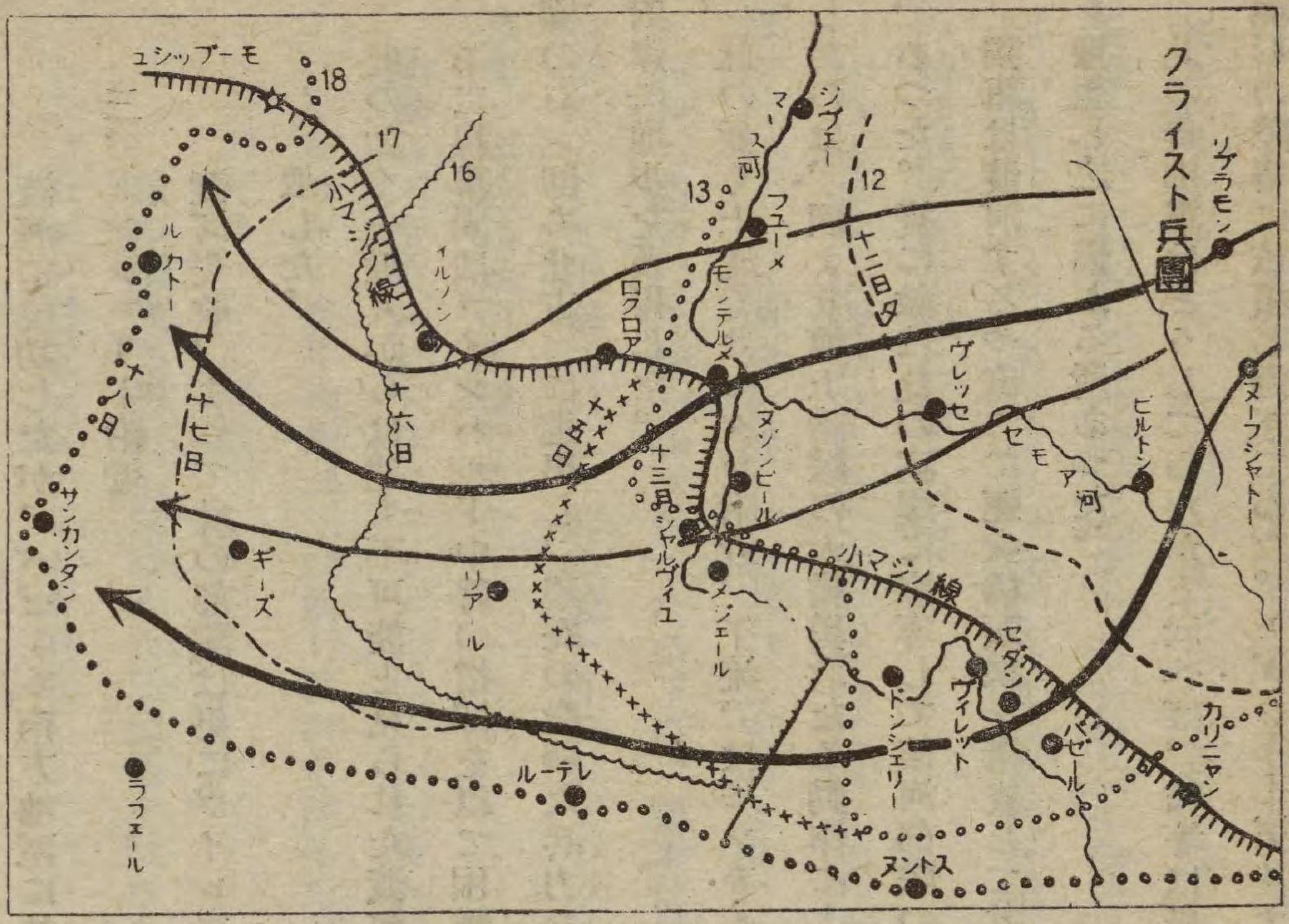
此の如く一般人からは迚も不可能と見られた渡河が不思議にも成功した。

第二線軍團はラインハルド中將の指揮を以て困難なるアルデンヌ森林内を通過したが、直ちにグーデリアン軍團の右（卽ち北方）に進出し、現在の微弱な兵力を以てモンテルメ附近でマース河の渡河を强行して成功し其の對岸に地歩を獲得した。

此の如く上流ではセダン附近、下流ではモンテルメ附近（兩者の距離約三十吉米）の二箇所に於て渡河の成功したのは、固より地上諸隊の大膽勇敢なる動作によるも其の主なるものは强大なる空軍の制壓的威力に負ふ所大であつた。實に敵は此の空爆に痲痺して渡河部隊の不利に乘じて反撃することが出來なかつたのである。

獨軍は渡河するや直ちに逐次橋頭堡を構成して其の地歩を確保すると共に明十四日は敵の大規模の攻勢あらんを豫想し之に備ふる所あつた。

此の時佛軍はどうしてゐたかと云へば、彼等は局部的には抗戰もしたが統一がなかつた。そして彼等は餘りに地形の障碍に依賴し過ぎてゐた。セダン――ディナン間のマース河の峽谷は河幅五十乃至七十米、水深は甚だ深



獨軍のマジノ線突破

く絶對に徒渉は出來ない。而して水面は河岸より約百米も低下してゐて沿岸は屏風を立てたやうな斷崖絶壁で、道路を構築することが出來ず、單に隧道を有する鐵道のみ谷底に沿ひ縱走しあるに過ぎない程である。此のやうな地形であるから彼等が油斷したのも無理はない。しかし其處には又他の原因もあつた。今それを左に述べて見る。

【マジノ線突破】　佛國統帥部の考へでは、獨軍は前世界大戰の轍を履んで先づ和蘭に侵入し次いで白耳義を突破して北佛に迫まるものと判斷して防禦計畫を樹てたのである。而して前述のアルデンヌの大森林は林間の道路が狹く到底重砲や戰車を通せないと云ふのが、其の道の人々の通念であつた。それでセダン附近から北方ダンケルクまでの陣地には、第二軍、第九、第一、英軍、第七軍と云ふ順に配置して、

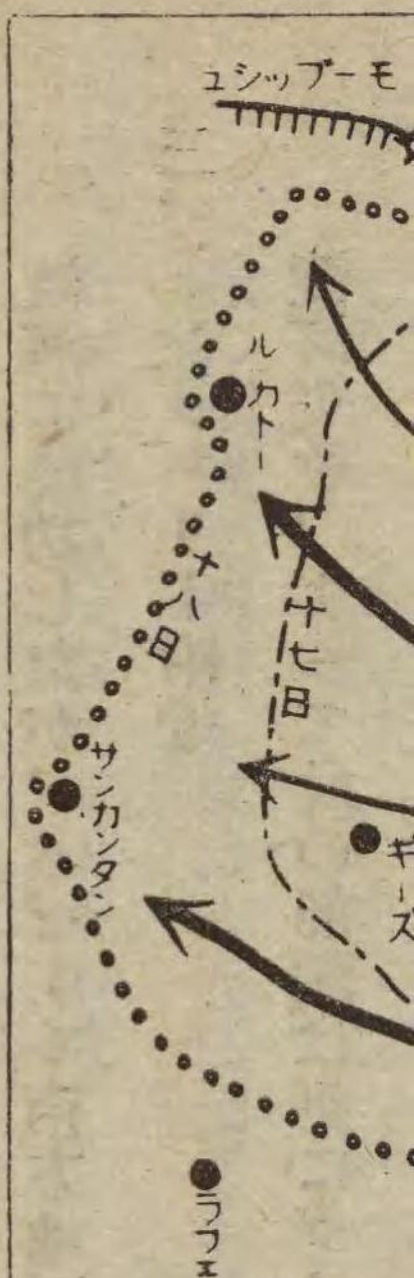
前年の秋、波蘭戰爭が濟んでから約八箇月も其の儘の姿勢にあつたのだ。兵は神速を尙ぶのに宣戰布告して、こんなに長く自重してゐるのは不思議に思はれたのである。之には色々な原因もあらうが、確かに獨逸の宣傳戰、

前年の秋、波蘭戰爭が濟んでから約八箇月も其の儘の姿勢にあつたのだ。兵は神速を尙ぶのに宣戰布告して、こんなに長く自重してゐるのは不思議に思はれたのである。之には色々な原因もあらうが、確かに獨逸の宣傳戰、謀略戰、思想戰、詭騙戰の手に懸かつたと見るべきである。

ヒットラーがダンチッヒ問題で波蘭に侵入したのが不都合だと云ふので英佛は獨逸に對し宣戰し、波蘭救援軍を派遣すると聲明したが、それは實行されなかつた。佛國外相は「波蘭よりは祖國佛蘭西の方が大事だ」と低い聲で本音を吐いたと云はれてゐる。英國も同樣そんな俠魂を奮ひ起たせる國民でないのである。

それで佛國としては對獨宣戰を表明した以上、一戰は覺悟したであらうが、奈破翁のやうに、モルトケのやうに攻勢を執るでなく例のマジノ線に據つて防禦すると云ふのが作戰の方針であつた。マジノ線は佛國の對獨戰に於ける命の綱であり、心臟であり所謂生命線である。兵力が足らず、飛行機も戰車も劣勢な佛國としては此のマジノ線に據つて野猪のやうな獨軍の侵襲を防がうとしたのは無理のないことである。

それで佛國は國民に對し軍威を示す積りであつたか或は獨軍を少しでも多く牽制して波蘭に聲援する考へであつたか、宣戰直後若干の部隊を進め國境を越えてザール河畔の獨領を侵したが、其の後一向積極的行動を敢てせず、獨軍が波蘭戰爭を終つて獨佛國境に轉進し來たるや、サッサと退却してマジノ線のトーチカ内に潛り込んで了つた。之は單に對獨恐怖心ばかりの爲めでなく、何となく佛國人は今回の戰に氣乘り薄しであつたからだ。それには色々な原因もあるが、前世界大戰の時よりも、亦ナポレオン三世の普佛戰爭の時よりも遙かに〱戰爭氣分



と云ふのが、其の道の人々の通念であつた。それで
セダン附近から北方ダンケルクまでの陣地には、第
二軍、第九、第一、英軍、第七軍と云ふ順に配置して、

が引き立たなかつた。

獨軍が西方戰線に現はれたならば、直ちに佛軍に對し猛烈な攻擊が開始されるものと、佛軍は勿論覺悟し、全世界もそれを期待した。然るに一向そんな事がなく獨軍は全線に亙り沈默を續け、其の空軍は單に小規模な偵察をする位であつた。之に反し英國艦船に對する獨潛水艦の奇襲は頗る激烈を極め、英航空母艦カレヂアス號を擊沈するなど海上の英國被害は激增する許りであつた。

かうした西部戰線の鈍重な膠著狀態は半年以上も續いた。戰線の或る所では石橋一つ隔てゝ獨佛兩軍兵士は暢氣な對峙を見せてゐた。灰色の服裝の獨兵がカーキ色の制服を著た佛兵と河の兩岸を巡邏してゐて一發の銃聲も起らない。双方の砲兵は有利な目標が現はれても、亦要塞構築に必要な材料を積載した多數の貨車群が見えても互に沈默してゐる。近く見える兩國都市の工場地帶の煙突から濛々たる焰煙が手に取るやうに看取されても、兩軍からは砲擊も空襲もなく全くの平和な戰線であつた。かくて大戰の半年は戰爭なき大戰の平和、平和なる戰爭として未曾有の特異性を示した。

それでは獨逸は、或は波蘭作戰の完了を機會に一つの平和攻勢を執るのではあるまいか。と言はれてゐた。果せる哉ヒットラーは對波戰終ると國會を召集して平和を提唱した。其の內に次の如きことがある。

「獨逸は現在及び將來に亙つても佛蘭西に對して如何なる領土的要求を有しないことを保證する。獨逸は英國との諒解に達せんが爲め是れまでにも種々努力したが、予は今日に於ても世界の恒久的平和は唯英、獨兩國の諒解によつてのみ贏ち得られるものであると信ずる」と。

佛國に對しては如何なる領土的要求も有しないことを明言したのである。若し佛國にして此のヒットラーの提

せる詭ヒットラーは對波戰終ると國會を召集して平和を提唱した。其の內に次の如きことがある。

「獨逸は現在及び將來に亙つても佛蘭西に對して如何なる領土的要求を有しないことを保證する。獨逸は英國との諒解に達せんが爲め是れまでにも種々努力したが、予は今日に於ても世界の恒久的平和は唯英、獨兩國の諒解によつてのみ贏ち得られるものであると信ずる」と。

佛國に對しては如何なる領土的要求も有しないことを明言したのである。若し佛國にして此のヒットラーの提言を採り上げ對獨調整の手段を講じたならば或は佛國の運命は全く別な方向に好轉したかも知れなかつた。しかしヒットラーの提唱は果して何處まで眞實であつたか、彼の書いた「我が闘爭」には「佛國は獨逸及び予の永久の仇で必ず報復せねばならぬ怨敵である」と言つてゐる。兎に角英も佛もヒットラーの平和案を欺瞞として拒否した。そして佛國は英國依存主義を繼續した。

英國が佛國を對獨戰爭に引摺り込むことは英國の安全のためで、佛國の犧牲は英國にとつては必要であつた。ヒットラーは英佛が予の平和提言を拒絕するならば我々は毫末も戰を恐れず、最後まで戰ひ拔くであらうと、英國の機先を制して丁抹、ノルウェー戰を敢行した。此の時佛國は英國と協同して出兵したが、是れ亦甚だ緩慢なもので單に英國への附合ひと云ふ程のものであつた。佛國人民は殊更冷靜で案外暢氣に構へ、新聞あたりもノルウェー戰は海陸共に英獨の戰で佛國の關する所にあらずと全く他所事のやうに扱つてゐた。

佛國民はどうして斯んなに錯覺患者になつたかと云へば、曩にヒットラーが平和提言に際し「獨逸は佛國を攻擊の的とせず、獨逸の敵は英國である」と强調し、其の後も有らゆる手段を講じて對佛宣傳に力を注ぎ、獨逸は決して佛國を攻擊しないと云ふ印象を佛人に對し植ゑ付けることに努めて來たのである。

獨逸の斯うした對佛宣傳は佛人の頭の中に「獨逸は佛國を攻擊しないで英國だけを敵として攻擊するだらう」